毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治三十年一月十日發兌

第九拾參號

清少納言

綠亭主人著

定價十三錢　郵税貳錢

大なる二個の女星は、炳焉として王朝の碧落に懸りて、櫻の如き麗姿と、梅の如き清姿とは、双々相映して、愛に幾萬の鬚髯男兒を悩殺せしめたり、櫻の如き紫式部は既に櫻の如き麗筆に依つて、其の姿世に出でぬ、今や梅の如き清少納言は、又梅の如き清筆に依つて、其面影を現はさんとす、‖玲瓏たる彼の双眸は如何に鋭敏なりしか‖雪の如き彼の双腕は如何に彫筆を弄したるか‖丹花の如き彼の朱唇は、如何に克く謂ひしか‖夜深かく紅燈の下、靜かに之を繙けば、蘭麝薫じ、美人來るの想ひあるべし、紫式部を讀むものは、必ず清少納言を、讀まざるべからず

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

謹賀新歳

京橋區尾張町　松田白牡丹本舗

賀正

小石川水道端町　國の礎社　林　恕哉

謹賀新正

家庭雜誌社　編輯事務一同

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價

一冊金五錢　郵税金五厘
半年（十二冊）前金五十錢　地方郵税共金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓　地方郵税共金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

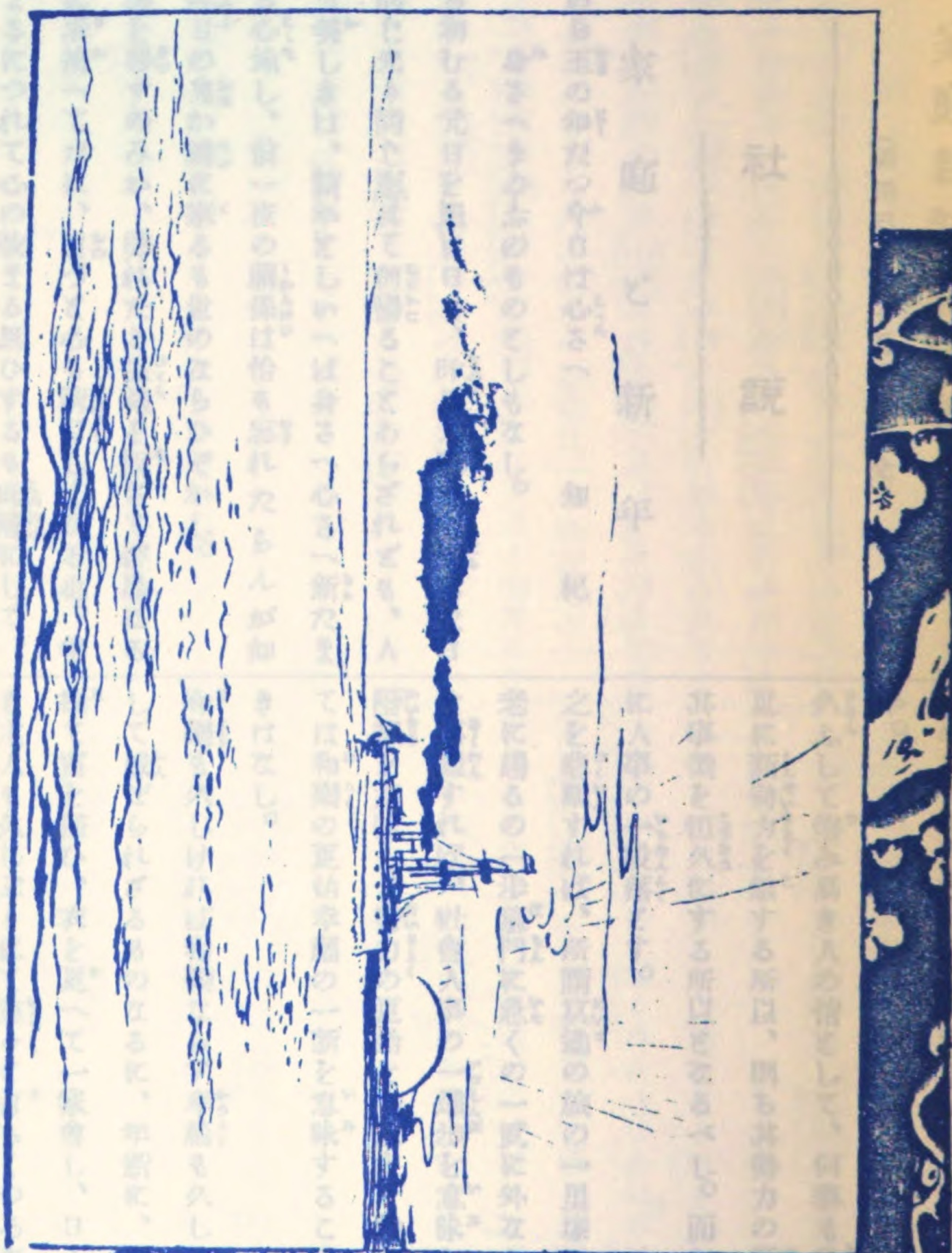
發行兼印刷人　吉崎圓吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

（附錄の三）

明治三十一年一月十日發行
家庭雜誌第九拾參

目錄



家庭雜誌第九拾參號

（明治三十年一月十日發兌）

社説

家庭と新年

知紀

あら玉の年たつ今日は心さへ
身さへきのふのものとしもなし。

年立ち初むる元日を照す日も、昨日大晦日を照した日も、同じ光り同じ影にて何變ることとあらざれども、人心の可笑しきは、新年としいへば身さへ心さへ新たまりたる心地し、前一夜の關係は恰も忘れたらんが如く、昨日の鬼か禮に來るも世のならひぞかし。

居は志を移すのみか、弊れたる温袍を脱ぎて輕温なる小袖に着換へてだに、自づと心も淸々しくなる也。年の改まるにつれて心の改まる思ひするも此理にして、新年は人事の總てを新にするに此上なき機會にあらずや。

久ふして倦み易き人の情として、何事も段落あるは、更に新勢力を皷する所以、則ち其勢力の繼續を保ち、其事業を恒久にする所以となるべし。而して改暦は實に人事の一段落とす。

之を悲觀すれば、所謂冥途の旅の一里塚にして、勿論老に趨るの一歩墓門に急ぐの一武に外ならずと雖、之を喜觀すれば、社會人事の一進歩を意味し、文明の一階級を意味し、勢力の更始を意味す。特に家庭に在りては和樂の更始幸福の一新を意味することと新年より善きはなし。

和樂も久しければ和樂ならず幸福も久しければ幸福として感ぜられざるものなるに、年新に、門に松樹て竹樹て室を掃ひ、衣を更へて一家會し、日々公務に暇なき主人も久しぶりにて悠々と打ちくつろぎ、學校に寄

留する子女も來り、稚きは庭に羽子をつき門に紙鳶を飛ばし、欣々として嬉笑するに及びては、見慣れたる夫妻の面も何となく新たなる心地し、一家の和樂融々として更始せらるべし。一年の幸福はこれよりして生ぜん。

果して此の如くにして年を迎へん乎、無意義なる改暦は忽ちに無數の意義を生し、無量の趣味を生じ、優に人事の一大祝節として擧典するに足り、特に家庭に在りては和樂更始勢力休養の好時期として最も必要なるものとなるべし。

是の故に一年の事は大晦日を大段落としてそれまでに萬事を纏め、新年になり心殘りすると如きとあらざらしむるのみならず、一年を顧みて其成功したる所をして十分に其勞に酬ひ、其費消したる時日に酬ふるに足るとして自ら滿足せしめざるべからず。自ら顧みて滿足安慰するに足るべき成功若くは勞力なくんば、慊焉として何事か心殘りする心地し、折角の新年も新年とならず、又其年もはか／＼しからずして大晦日に到るべし。

一年の計は元日に在り。始めあるものも終りあるは鮮きならひなれば、况して始なくして終りあるを望むべけんや。昨日の事は昨日に濟まし、前年の事は前年に濟まし、而して新年には何心殘りなく無邪氣に樂み、以て周年の間に消費すべき新勢力を養ふと共に、豫め定め置きたる一年の事業計畫に從ひ勉めて怠らざるやうに着々實行し始むるを要す。是れ則ち大晦日に事業の總勘定をなして餘りあらしむる始めにして、此くの如くならざれば、次の新年に心殘りなく樂むを得ざる也。

人多くは勤勞の必要を知て遊樂の必要を知らず、勤勞の重ずべきを知て遊樂の重ずべきを知らず。働きさへすれば何をして働らくも問ふ所にあらずといふ能はざ

ると共に、樂みさへすれば何をして樂しむも問ふ所にあらずといふ能はざるを知らず。然れども遊樂はもと勤勞の資本なれば、勤勞の必要と同じ價値に於て必要に、勤勞の重ずべきと同じ重量に於て重ずべきものたり。勤勞の必ず善果を得べきものを擇ばざるべからざると同時に、遊樂も必ず有効の勤勞を生ずべきものを擇ばざるべからず。去れば新年の遊樂は一年の勤勞の資本たるべきものを擇ばざるべからざる也。

已に一年の計は新年に在り、新年の計は一年の勤勞に資本たるべき遊樂に在り、而して新年の遊樂は則ち家庭の供給すべきものなりとせば、家庭は最も清健なる遊樂を擇みて之を提供し、遊樂者は各其爲すべき事業は之を前年に爲し盡して全く遊樂するを得るの資格を作り、而して十分に新年の樂みを樂み、以て徐ろに一年の勤勞に就かざるべからず。新年を無益に消過するは則ち一年を無益に消過するの始めなるを知らずや。

新年は總ての人事の更始なれども、其事は社交に始まり、和樂を主とし、實に家庭の支配に屬す。如何に新年を善用すべき乎は、家庭の主宰者が常に深く講究し置くべき問題なりとす。

元日

元日や雲非はるかに鶴の聲　直溫
元日や空に從かふ四つの海　普成
元日や道に餌ひらふ小田の雁　天府
元日や松靜かなる東山　閑更
元や福壽草おく違ひ棚　千軒
元日やされば野川の水の音　來山
元日や家にゆづりの太刀はかん　去來
元日や佛法いまだ注連のそさ　蓼太
元日や扇の外は手にふれず　以靜
元日や大工なほめる神の棚　水室
元日や母さ酒くむ白拍子　餓帶
元日や鬼ひしぐ手も膝の上　梅室
元日や酒はいつもの酒ながら　好文
元日や何たさえん朝ぼらけ　愚知

元日や置き直したるふしの雲　花明

論説

基教主義女子教育界の一大缺點

藤田軍太

日清戰爭は教育界に一大刺激を與へ條約改正の結果は泰西流の教育を促せり

一時我教育界を風靡し特に泰西流の教育なりと自他共に稱へし基教主義の女子教育が今日の好運に際會し獨り氣焔の揚らざるは何ぞや、其原因として世人の唱ふる所を見るに曰く私立學校は、公市諸學校の如く財政の豐富ならざるが爲なりと元より同種の女學校中には之を擴張するの經費なきのみならず之が維持をすらなす能はずして自然衰狀を來せるものあるべしと雖又財政豐にして校舍壯麗別に經費上の憂慮を要せざるものも尙日に退歩しつゝあるを以て見れば必ずしも今日の不振を以て財政の不足に歸すべからざるものある也

或は曰くこれ主として教育者か其人の乏しきが爲なりと、然りと雖現時何れの女學校も教員の數五六名を下らず甚だしきは生徒の數に半するものあるを以てするも其數の少からざると知るべし、元より教員の多數は所謂臨時教育者にして、教育家たるの資格を具備せざるものなるべしと雖亦余の知人にして日夜盡粹斯道に盡力せらるゝもの少からざるを見れば必ずしも教育に熱心なるもの少なしと云ふべからざるなり

是に由て之を觀れば女學界今日の不振は財政の缺乏にあらず又教育者の少きが故にもあらざるを以て他に一大原因の存するものなくんばあらざるなり

余思へらく教育法其道を得ざるこれ今日の不振を來せる主要の原因なりと

我國は元來家族制度を有し一家を以て一國の基礎となせるが故に彼一個人を以て一國の基礎となせる泰西諸國と其趣きを異にす、歐米に於て男女相寄りて結婚を擧行するや之より新に一家を建成す其の相離るゝや一家なるものなし、然るに之に反し我國の女子は如何なる場合に遭遇するも殆んど到所既成の家族に入らざるべからざるを以て其準備や勿論彼此其趣きを異にせざるべからず、然るに今日基教主義女學校の多數は其敎師よりするも將其成立よりするも西洋主義者流多數を占めヨシ又多數を占めざるも有力者に西洋心醉者多く現に西洋流の敎育行はるゝは何人も認むる所にして其卒業生が我家族制度の一要素と見做されざるを見ても其僞ならざるを知るべし

吾人は我家族制度の永久に保存すべきものなるや否に就ては多少の意見を抱けりと雖現に成立し將來も容易に廢らざるものなるべきを以て之に對し不適當なる人物を養成する女學校の衰微するが如きは元より訝るに足らざるなり何をか西洋流の敎育と云ふ、元より吾人は一々列記して其範圍を指摘するは到底なし能はざる所なりと雖只管に自由の發達を計りて抑制を賤み文字の多きを好んで實行の如何を顧みざるの傾あるは西洋流敎育の一端と云ふべし、其前者に至りては多少斯學者の辨解あるべしと雖世論の已に定れるを以て余今玆に警せざらべし、されど其後者に至ては今少しく當局者の注意を煩さゞるべからず

女子は元來良妻となり賢母となるを以て其理想とすべきものなるが故に一家に在ては陰に其夫を助け、功成て居らざるが如き謙德を治めざるべからず故に其言はんよりは寧行ふに若かざるなり然るに現時の基教主義女學校の敎育法を見るに成べく多くの文字を知らしめ成るべく博く其識を發達せしめんとするが如し吾人元より文字なきの女子に與せずと雖徒らに讀書に沈溺し

て習慣風習を以て學理に適せざるものとし拋棄するが如き生意氣者流に贊成せざるなり、元來二三の女子を除き女子の文字を知る所以のものは女子が女子として其職務を全ふする所以の道を知らんが爲めにして云はゞ方便たるに過ぎざるなり、故に女子が經濟學を研究するは其學理を是非せんよりは寧ろ經濟の道を知らざるべからざるなり、然るに女學校に於る經濟學の敎授法を見るに、敎員の才能有無は暫措き或は經濟學の何たるを說き生產の要素物價論、地代說、通貨の要件効用等を陳べ甚しきはウオカー氏の著書たる經濟學を以て敎課書として使用するものあり、宜なり徒らに生意氣に長じて其實際に疎きや試に其生徒に向つて百圓を其父某に送るには如何にすべきや、將又二十圓の餘金を有するを以て之を如何にすべきやと問へば何人か之に明答を與へ得るものぞ

嘗て聞く女子は一家に於る大藏大臣にして一家の隆替一に女子の雙肩にありと、果して然らば女子の必ず有せざるべからざるものは家事經濟の才なり、經濟學の學說にあらざるなり

夫れ家事經濟の事たる、經濟學上消費の部門に屬す故に女子の才幹を要するも亦消費經濟の上ならざるべからず、元來經濟の幼稚なる時代に於て論述せらるゝものは生產論にして一歩を進むれば交換分配となり遂に消費論となるべきものなるを以て、女子が學ぶべきは生產論にあらずして消費論とせば女子は今日の社會上必須の地位を占むるのみならず將來幾久しく其特能を誇るに足るべきなり、現に我國の如き封建の遺風尙存し朝に千金を得て夕に千金を散ずるの風習存するときにあたり一家の大藏大臣たるべき女子にして實際上經濟の才能を以て之を利用せんか我國の今日何んぞ資本の缺乏を憂へん惜哉今日の女學生此準備なし徒らに學說を說て其運用の方法を講ぜざるの之れ今日女

子教育界の缺點にして其振ざる所以も亦茲にあらんか他其の諸學課に於ても亦然り、斯道の敎育家たるもの一考せざるべからざる所以なり

科學

海の世界

第二　海中の生物

水中に於ける生物は陸上に於けるよりも多し。海の懐に生育する生物の豐なる、地球何の處にか其比を見ん。南北兩極より赤道直下に到り、東の端より西の終に至るまで、生物充滿す。海中到る處、それ〴〵の生物の繁殖と遊泳とを見る也。海洋は人に在りては恐ろしき死の谷なれども、其實幾億限りなき生物に取りては其生命と健康とを保つ家なり。波の裏に歡喜あり、濱の邊に幸福なり、到る處に蒼天の藍色を湛ゆ。

海に於ける無數の生物は、植物より動物に到るまで悉く其季候、其深淺、其鹽分、其波の動搖、其潮流の緩急に由りて影響せらる。されど茲に記憶すべき事あり。乃ち海の氷結は其表面に限る事にて、五百五十尋の底に下れば如何なる緯度と雖も其温度を同ふす、又た暴風怒濤と雖も十三四尋以下には何等の影響をも及ぼす能はず、されば海中の生物にして其表面に在らざる限りは何時にても其安全なる場處、其好む處の位置に到るを得べき事、これなり。

海の生物は其形躰甚だ弱きが故に、海の靜穏なるを愛す、海生動物の肉は軟かく且つ透明の粘液質を含む、尤も發達せる種類の骨と雖も多少弱軟なり。これを陸上動物に比すれば其重量其成質共に劣れり。されど貝殼及び珊瑚の如きは蓋し硬質に屬す、かくして海生動物の中には最軟質の者と最硬質の者とあることを知ると雖も、概して言へば、海の生物は靜穏なる境遇に適

す。

一口に海の生物といふと雖も、場處に由りて其種類を異にし、一定の法則ありて之れを制限す。海濱にて發見さる可き種類の者は決して海の沖にて見出す事能はず、海底深く潜み居るものは、水の表面にて見ること能はず、驚く可き世界なる哉、或は小さき貝魚を養ふ藻草より十五丈の長さを有する海草に至るまで、或は顯微鏡を以て僅に見得る程の水虫より小山の如き鯨に至るまで、其大小、其色采、其形狀の限りなき變化！吾人は已に無數の植物、無類の動物を發見し、考究したり。されど尚ほ如何に多く未だ吾人の知らざる生物の存することぞ。二千年の間、絕へず動植物學者は此發見に從事せり、されど尚ほ如何に長く此考究の續けらる可き事ぞ。

海潮退きたるあとの水溜に色々の生物取りのこさる。博物學者は此水溜より樣々の標本を採集す。濱邊に生活して、其食物、其商業、其職業を得る人物も亦た、潮引きたる濱に走り集る。海草を掻き集むる老翁あれば、はまぐりを掘る童兒あり。石を轉してさゞゑを拾ふ女あれば、砂を耕やしてしやこを集むる男あり。げに樣々ぞかし。

地中海其他、潮の干滿の度の極めて少なき海濱にては海中に生育する動植物、濱の水溜に取殘さるゝと甚だ稀れなりとす。又た岩礁に固着して容易に波浪潮流のために取去らるゝことなき生物もあり。此の故に水溜にて捕ふる能はずして深く海底に游泳せる處を捕へ、又た岩に固着せるものは其固着のまゝにて撿せざる可からず。

史談

上田秋成の妻

五行子

狂氣亂心、世に憐れなる生をなせし、かの氣違ひといふもの、古來これを書に徵すに、大抵獨身の人多し。妻帶の人、又これなしといふにあらねど比べ見れば甚だ少なし。こも亦然るべき理なり。夫唱婦隨、琴瑟相和し、家庭とゝなふて春の如く、和氣洋々として室に溢れ、紅閨それ永なへに温かき處、何の足らざることとかあらん。終日の勞、神殆んど盡きんとするも、歸りて嬉々たる妻に對す、百事皆消えて活氣再び玆に生ぜん日は日につれて睦み、月は月につれて親しむ、實に親しきは是れに上越すものやあらじ。

妻なるかな、妻なるかな、善良なる妻は夫を生かし、温和なる妻は、夫を助けて世に立たしむ。家庭なるかな、家庭なるかな、温かき家庭はこれ人生百難の避塲なり。胡馬北風の吟、我これを漢詩に見、スウヰトホームの詠、我れそれこれを西書に讀む。彼れ比喩し、これ歌ふ、ともに我れを欺かず。輕薄の人、浮泊の士、誰か無妻の説をなす、誰か家庭の累をいふ。

我れ、彼れの妄を笑ひ。我れ、彼れの愚を罵る。寶暦の文士、藉々其名今につたふ、鳩溪平賀源内は、遂に狂に倒れたり、彼れには家庭も妻もなかりき。

寛政の人、無腸子上田秋成は、其學の博きに於て、其性行の拗なるに於て、又其世に容れられざることに於て、實に似たり、實に似たり、實に源内にこれ似たり。さるを彼れは、末路悲慘に、これは晩年賦に樂し。これ一に其妻帶のことありしと、其家庭の樂を欠きしと、唯此一點に基すと信ず。

源内と秋成、もし地をかへてわらしめなば、抑も如何なるべかりしぞ。いふを待たず、語るを待たず、源内の如きも亦欣々秋成が如くに終らん、秋成や必ず、源内の如く悲慘に果てん。

これ余のかたく信ずる處なり。

我これによりて、大ひに源内の不幸を憐れみ、いたく秋成の幸福を祝す。

嗚呼羨しきかな無腸翁、翁はこれ妻によりて作られたりし、妻によりて生されたりき。

我がための、まもりの神にておはしけりと、手をすりて、妻にむかひいひしと聞く、翁が爐邊の識言、これ唯翁一身の上にあらず、世皆擧て然らざるなし、余も亦余が最愛の妻にむかひ、翁の如くいはんと欲す。

斯くの如くそれ傳ふべき、秋成が妻といふは、もと京のあたりなる。九條の農何某の娘なり、後横山氏に養はれ、父母に從がひ浪花にうつる、名を玉とよび、才色兼美の女なり。年二十一にして秋成に嫁す、秋成は壯年にして尤も放蕩、酒に荒み色に溺れ、常に八方に戯れて殆んど家にかへり來らず、さるを一片の怨める色なく、小心翼々姑に仕へて更に更に、怠ることなし、もし此一のみをもてこれをいふも、彼女は實に烈女傳中の人なりけり。

洒掃薪水の傍ら、暇にまかせて古今の書を讀み、數々勉めて學びければ、秀才いよ／＼光を發して、得ると賦に多かりき。されば其よみなせる歌の數々、かきなせる文の數々、積りて多きに至りたりしも、本性の温良は萬の事にゝつましく、一も色に驕るなかりき。

梅津の里の歌人、橘の經亮は秋成が尤も親しき侶にして日頃常に往來し、妻ともわりなく語らふ人なり、伴蒿溪も亦然り、此人々にして猶ほ其ことを一つも知らず、夫秋成自身すら、妻の沒後その手箱を開き見て、詠草のつんで多きに驚き、初めて其才を知りし程と、

逸事の記者の之を語る、實に奧床しき限りならずや。」

四十年來、夫に從つて彼處に轉じ、此處に移り、貧をまもりて操をかへず、遂には老を長柄にむかふ、剃髮瑚璉尼と呼ぶ。

老翁老媼、爐邊相對して茶を喫し、寒夜榾を焚いて相語る、思ふて茲に想像すれば、光景惚として机邊にうかぶ、實に一幅の好畫なり。

瑚璉尼其齡五十八、生母と養母と共に見送り、茲に又其あとを慕ふて逝けり。

一篇の文字皆珠玉、文壇珍としてこれを傳ふ、雨月物語、巧みに人世の弱をうがてる。僻物語の如きを初め、國文和歌の書其數多く、秋成の手になりしもの、過半は妻の作りしなり。嗚呼それ妻の作りしなり。諸子此言を奇とするなかれ、直接に筆を取りて書くをのみ、書を作るとこそいふべきやは。

ワシントン、アーヴ井ング

其の字生

一陽來復、明治三十年の春とはなれり。萬彙各々嬉々として、天地ともに悠々たり。定めて知る、親愛なる我が讀者諸姉諸兄、身神すべて健全なるべし。東南に雲おさまりて、西北に風靜なり、瑞氣洋々たるの此時新らたに紙上に相まみゆ、何の喜びかそれ若かん。

筆を若水に洗ひ、窓下文几の塵を拂ふて、茲に又、一の文豪を傳へまく欲す。

借問す、そはこれ誰ぞ?

亞米利加合衆國の人、ワシントン、アーヴ井ング《Washington, Irving》、即ちこれなり

抑も歐米の文士詩人、其名を我國人に知られたるもの實にこれ少なきにあらざるなり。然れども、ワシントン、アーヴ井ング、それ其人の如く、誰か一般に知られたるものゝあるべき。沙翁や其名甚だ大なり、ゲー

テや其名尤も高し。其他、シルレルの如く、ハイ子の如く、バーンスの如く、キーツの如く、國人これを傳ふれども、そはこれ社會中、尤も僅かなる一小部分、單に學者に知らるゝのみ。學者中の又少數に知らるゝのみ、これ我國に於てのみにあらず。傳へ聞く、彼等が故國、歐米の地に於て猶ほそれ然りと。

ワシントン、アーヴヰングに至りては、それ然らず。苟くも眼に一行の蟹字あるもの、殆んど彼が書を讀まざるものなく、實に彼が名を記せざるものなし。然かも學者といはるゝ人、藉々猶ほそれ彼れを語る。嗚呼斯くの如く、ワシントン、アービング、學界の上下に通じて、弘く弘く誠に弘く、弘く世間の人に知らる。我國に於てのみそれ然るにあらず、彼が故國、亞米利加合衆國はいふも更なり。其他至るところに持て囃さる。

英國近世の大家、小說界の巨匠として、其名文學史上に輝き、赫々其榮をヂッケンスに競ふ、サッカレー彼れについて言へることあり。此人にして此人を許す、文は題目に叶ひ、筆は人に應じ、見るが如く又見るが如し。

即ち其概略に曰く、

アーヴヰングは、東半球の人に知られし、最初第一の西半球の文士なり。彼れは革命の擧と共に生る、父はニウヨーク市の商人なり。彼れは合衆國の人、貴賤の別なく、男女の論なく、共に共にこれを尊び、いづれもいづれもこれを重んず、國父其人の名を帶べり、然して又、其國父の名の我歐洲の天に來りし如く、彼が名も、同情の裡に、歡笑の裡に、喝采の裡に、我歐洲に入り來れり。然して其新來の國に於て、斯の如く歡迎せられたることは、彼の喜ぶ所なるべし。必ず彼れは喜びしなるべし。

其故國亞米利加に於て、一般が彼に對する尊敬は、區

々たる個人的のことにあらず、即ち甲は彼れを愛し、乙は彼を疎すといふが如きことにあらず。上下に通じ、老若にわたり、其ことや遍滿にして國民的（National sentiment）なり。我彼國に旅せし時、目のあたり見てこれを知れり、全國到る處殆んど一つの、彼れに敵意を狹めるものなし。ニウヨーク、フヰラデルフヒヤ、バルチモア、或はワシントンの如き各所の市街、いづれの地にかそれ彼が名の唱へられざる。アービングハウスとはこれ到る處に建てられたる、彼が名に因なむ學院なり。身に千金の富を帶び、揚々濶歩人に驕る、もとより吾人のことにあらず、一般の尊敬それ斯の如きに至りてこそ、身を文學にゆだねたる者、それ瞑すべしといふべきなり。

水は淸くして洋々たり、日夜流れて息む時なし。ゴムの樹は青くして丁々なり、朝夕枝を壓して婆娑聲あり鳥晴を喜んで空に翻けり、牛食に飽いて草に眠る。光景一に畫の如く、寧ろ仙境に近きハドソンの河畔、一の茅屋木の間に立てり。これぞこれ、平和の文士、ワシントン、アーヴヰング其人の、樂しき生活を送る家なり。家門は常に來者に開かる。事の故を以て家門來者に閉ぢられたるもの、かつてかつてあることなし。元よりも大なる建物ならず。さるを、魏々として天に高き、堂塔城郭のそれ等にもまし、或は油繪に、又は水繪に、いと美はしく畫きなされ、八方につたへらる、又偉なりとはいふべきなり。

嗚呼それ、名聲斯の如し、されば一言一句、苟くも彼れが名を以て出たるもの、忽ちにして版を重ね、時ならずして刻を重ね、剞劂ために勞れて、紙價頓に高きに至る、されば彼れが收入の多きや、又それ察するに餘りあり。さるを彼れは、更らに奢らず、なみ／＼の田舍人、低き生活の度に甘んず。何が故にそれ然るか。これ然るべき、所以あるなり。

彼れが一家、緣につながる程の人、或は種々の事によりて、乏きを衣食に感ずるもの、いづれも來りて彼れによる、現に余が彼れを訪ひし時にも、四五これ等の人を見たり。彼れはこれ等多くの人を養ひ、各々其處を得るを見てこよなく喜ぶ。然して自からは單獨更に妻を迎へず、其かつて幼少の日より相愛せし、意中の佳人、年僅かに破瓜にして、あへなく去りしを常につねに心に描がき、高潔なる愛に慰み、多くの家人《奇食者》の上にたつて日を送れり。

述べ去り述べ來る、彼れについての余が感は、いよ〳〵進んで、いよ〳〵多く、更につくる處を知らず。一言以てこれをおほへば、彼れは、其家庭に於て、善良なる、温和なる、寛大なる、然かも情に富める主人にして、社會に於ては、圓滿なる紳士の典型なりといふべし。

或は、意をそこね、譯を誤まち、其眞を得ざりしこともあらん、されどそれ上の如し。

他境の文士猶ほ斯くの如くにいふ、自國の評は知るべきのみ。

斯く持囃されたる彼れは、一千七百八十三年、ニウヨークに於て生る、父はさゝやかなる商人なり。初め法律の學を修め、辯護士となりて世に立ちたり、されども其肉躰の健康と、其精神の嗜好とは、ともに〳〵これに叶はず、遂に其事をやめて諸兄と合し、或商業を營めり、其間筆を取りて文をなすもの、The letters of Tonathan Oldstyle を初めとして甲乙相つぎ、一千八百二年より續々として版にのぼさる。

一千八百十八年、彼三十五歳の時なり。組合の商業思はざる損を被むり、殆んど破産の厄に際せしを、彼專心に筆をふるひ、孜々文を賣りて他より補ひ、充分にこれを支へ得たり。

其後英國を初め、歐洲の各國に旅行し、見聞いよ〳〵

増して、想は日と共に高く、名は年と共にあがる。茲に於てか彼れはあげられて、公使館の書記となり、駐在ロンドンに派するもの凡そ二年、ついで西班牙公使となりて彼國に渡り、其首府マドリツドにあるもの、殆んど五年、任尤も任ふて國名を更に汚がせしことなし。

年來り任滿ちて、彼れは茲に故國にかへり、悠々自適世に處して、一千八百五十九年、古稀七十六の齡を以て、永くながく、世より去れり。

讀者諸子の中、必ずや學校に於て、或は家庭の書窓に於て、スケツチブツクを讀みしあるべし、其 The wife の如き Westminister alebey の如き如何に玲瓏珠の如き。

これこのスケツチブツクの著者、ワシントン、アーヴヰング其人が、千古亡びざる紀傳性行の一片なり。

新年の歌　（樂翁公）

千世よばふ聲はへたてぬ草の戸や
　軒端の松の春のはつかせ。
朝かすみたち出て見れは誰か門も
　松と竹との春のはつかせ。
世のふりも人の心も松竹の
　みさほにならせはるの初風。
天かしたなひく劍の光りにも
　くもらぬ御代の春は見えけり。
花の上にささはんものと思ふにも
　こゝろうきたつ春のはつかせ。
梓弓いそちの春はむかふれと
　やたけ心はたゆまさりけり。
ゆたかなるたもとにふくも大君の
　めぐみのうちの春のはつかせ。



文藝

大さかづき

和歌の浦人

亂麻解索の綸を解いて、茲に天下を一統したる、德川家康がため、右の腕とも頼まれたる、昵近の親臣、四天王の筆頭に、井伊直孝となんいへるありけり。これぞこれ、幕末の大政治家、外交の許否を、一顧の中に忽ち決し、大東開國の人と今にあほがる、江州彦根の城主、井伊掃除頭直亮の祖先なり。酒量他に超えて殊に深く、見ぬ唐の李泰伯、さては又、晋朝の詩人、菊に歸去來を謡ひし人も、實にや實にや、斯ぞありけんと柳營の殿中、其風潮すみゝゝにまでも行きわたれり、されば彼處此處、時に直孝を招きむかへ、月に花に或は雪に、宴を四季折々の眺めに張るもの、我れ後れじといと大ひなる盃を作り、これを以て酒をすゝむ。行く先も行く先も、變ることなき此事の、大ひに大ひに心にかなひ、こよなくもこれをめでたまへり。時しも今は新玉の春の初めの事なりけり、來復の壽き、一献差上げ申すべし、必すや駕を枉けたまはれかしと、辭を盡して鄭重の使を馳せしは、これ又、當代の覇臣、内藤忠興といへる人なり。折角の招き恭なし、されば疾う參るべしとて、伴人二三引具して、いともいとも輕やかに、其日彼の邸にこそ至りたりけり。主なん近く出迎ひて禮を述べ、頓て設けの席に招じ、座いよ〱定まりて宴は茲に開かれたり。献酬二三其度をかさね、漸く興に入りし時、例の大盃は出でたりけり、これは又大ひさ大ひなるもの、なみにもはづれていと大きく、一盃一升以上を入る、直孝一見大ひに興がり、はたと膝を叩いて主人にむかひ、心地よし心地よし、直孝これにてまいるべし、されどまづ主人公さきに一盃を傾け

て、さて其後にさしたまはれ、余は何盃といへども敢て辭せずといはるゝに主人忠興は殆んど困じ、知りたまふが如く余は酒量誠に乏し、さるを再三先きよりつゞけ、今は早や滿ち滿ちたり願くは更に然か宜はで、これを傾げたまふべし、いで〳〵酌しまいらせと、いふをやをら手にてとゞめ、然かくてはこれ誠に興なし、御身もし能はずんば、誰にてもよし、急きよび來りて待せしめよ、誰か誰かそれあるべし。されば陪客の人に問たゞし見んと、次の間にたちて其處にひかへたる誰れ彼れに一にこれを計りたり。各々は、さればなり、一盃のみなれば或はよけん、されどされど、井伊殿の酒量如何にしてかそれ誰一盃にして止むべきぞ、必ずや〳〵兩三盃やがて五六盃、重ねうけすんば許されざるべし、とても我々の能ふべきにはあらざるなりと、應じつる者一人もなし。止むなく前に出でゝ斯くといふ。嗚呼賴み甲斐なき人々かな、さる上はよしそれ誰にても苦しからず、番卒足輕それも擇はず、一に上下の別を許し、同間同席苦しからずいざ疾くゝゝと催さるゝに、されはとて主人忠興みづから下賤番卒どもの部屋に越き、酒量の多寡を以て人を求む、いづれも其量の多かるべきに思ひわづらひ、傾みにも答へざりけるを、新參の足輕、いとむくつけきものゝ進み出て、我これにこれ當るべし、何を致さんも主人の爲なり願ふは許さるべしといふ。さては汝能ふとや、苦しからず〳〵疾うゝゝ參るべしと、連れゆき服を改めさせ、これを奧に伴ひけり。唯見る、威儀儼然たる直孝ぬし、玉山將さに崩れと欲していまだ崩れず、大盃を前にして悠々褥の上に座す。流石は當代の名士、德川一家の棟梁なりけり。新參の者は恐るゝゝ進みもやらず閾の外に平伏して、三拜誠に恭々し。汝余が相手をなさんとや、許す許す、疾う々々近く承れとのたまふ、さればとて閾の內に進み入りいまだ拜伏して頭も

あげず、直孝これにむかひていふ、さて汝酒量それ如何ほどなる、さても一升は飲み得るや。飲み能ふ。二升は如何にぞ。飲み能ふ。もし三升に至る時は。さればなり、三升四升、それ升合は愚かなり、我が酒量よろしく斗を以て數ふべしと、答へける一言に直孝はいと〻笑つぼに入り、快男兒、快男兒、實に共に語るに足るげに面白き奴なりけり、いざ〻〻これにてまいるべしと、大盃かれにさして滿〻とそれに酌かしめたまふ、いといと持つ手もたゆげにこれを捧げ、一飲更に呼吸さへつがず、底に涓滴も餘すものなし。見事なり、見事なり、重ねて參れと、猶〻又も兩三度、いとなみなみと酌かしめたまふ、盃いよ〳〵度重なるにたすくべき下物なくてはあるべからず、汝もし興深かきことをし知らば、包までこれを語るべしその事の興に余のたすけられて、汝が盃をうくべきなり、如何に如何にとこれを催かす。さればなり、新參の此身、下賤鄙野にして語るべきの事を知らず、そは許したまはるべし。さにあらず、さにあらず、敢て遠きに求めずとも、いと手近きにあるにあらずや、それについて語るべし。手近きに其事ありとは、さて何事にて候にや。他にあらず、そはこれ汝が額に殘る、其瘡をこれ指していふなり、そも其瘡の事については、いと面白きことのあるべし、包まざれ、包まざれ、疾く〻〻語り聞かすべしとひたすらにこれを催したまふ。聞くがま〻に手にて額の瘡を撫て、如何なりけん、しばし愁然としてありしが、やがてから〳〵と高く笑ひ、これは又、よしなきものゝ御目にとまりたるものかな、興もあすも候はず、我が身幼少の砌り睦みあふ友と狂ひ戯むれ、誤つて石の上に倒れ伏し其時得たる瘡にして、さるふかき所謂あるにあらず、御前樣こそいと……だまれ、だまれ、無禮者奴、この直孝を何と思ふぞ抑も十六の初陣以來、十度ならず、二十度ならず、戰ひの塲に往

來し、千軍萬馬の間に馳せ、目にもの馴れし此身にして、金瘡と打瘡、いかでそれ等の別らであるべき、正しくもこれ汝が瘡は、金瘡にして打瘡ならず、然かも名刀を以て突きたる瘡なり、さるにても汝猶情強るや、此直孝を盲と思ふか、語れ〳〵疾く〳〵語れ、つつまんとすればよし、汝我太刀の銹となさんと、かたべなる刀を取りて立ちあがり、右手にかたく柄を握り、否といへば頓て斬らんず有樣なり。ハハー、恐れ入りたる御眼力、包みかくせし無禮の段〳〵、平らに御免下さるべし、今は殘らす申しあげんと、席を下りて兩手つき、私しもとは、甲斐國武田の家臣馬場信房が庶子にて候、父信房はあへなくも、長湫の役に於て討死なし、家は主家と共に亡び、いまだ幼少にして乳母に擁され一まづは信濃の國に立退きて農民の子の間にそだち年のいよ〳〵進むにつれ、家系身の程を聞き知るものから、如何にも〳〵、此まゝにて草莽の間に朽つるを恨み、夜毎日毎劍馬讀書の道を學び、時の來りなんことを神に先祖に祈りけり、嬉しきかな、喜はしきかな、大坂に於て士を募るを、失ふべきにあらざるなりと、早速馳けつけて彼處に越むき、眞田左衛門が手下に屬して、城内士の間に席を列らねおのれやれ今にも關東方の押よせ來なば、適れ功名の程をあらはし、世になき父か名をも揚けんと、待ちに待ちたる時はこれ、元和乙戌五月七日、さてよせたりな、よせたりな、其數凡そ百萬餘騎、大手の方に攻めよせたるを、よし何條の事あらんと、城内喊を作りてこれに應じ兩軍入れ亂れ戰いしが、時なるかな、命なるかな無念にも我軍いよ〳〵負色なりしに、惜からぬ命、捨つるは實に此時なり、いでよき敵にわたりあひ、最期の決戰なさんずものと、諸〳〵方〳〵と見渡す内、遙か南の一方より、かけ來りたる若武者は、赤地錦の直垂に緋威の鎧ゆたかに着なし、鍬形打つたる兜の緒をゝ

め、馬蹄塵をあげて、我に近づく、これこそはこれのぞむ敵なり、首を彼れに授くるか、又は此方へ打取るかいづれに一つ、いざ來れと矢聲をかけて打ち渡ると。語るに直孝は膝押しすゝめ一上一下斬り結ぶ果てしなければ太刀投け捨て、互ひに組合ひ兩馬が間。さにて候御前樣、兩馬が間にだうと落ち、いひ甲斐なくも我は彼の若武者の爲に組みしかる。組しひたることの嬉しさに、短劍すらりぬきはなし、首かき伐らんとなせし時。我身に取りて幸ひなるかな味方の者共十二三騎かけつけ來るに、若武者は。知らず識らず手許のゆるみ、首はかき得で內兜、慥かに手答へありたれども。急所をよけし我身の幸ひ、すきに乘して女ゝ敷も、一旦其處を落ちのびて、そも惜しからぬ命をば今まで永らへ候が、其時うけ得し額の瘡、今更いふも面伏せなり、さてさるにてもさるにても、何とて其日の有樣を御前樣には能くも能くも。知つたも決して無理ならず、其日汝を組み伏せしは、斯くいふ井伊の直孝なり。さては御前樣にておはせしか。さては汝であつたるか。思ひもよらぬ御目通ほり。彼時こそは諸共に、色艶ゝしき若武者の、今は斯くまで落ち果てたる馬塲三郎兵衞が、おほけなく同席尤も恐れ入ると、平伏なす手を自から取り、いよいよ席をすゝましめさて更たけてふけ行くまで、互ひに昔しを語らひて、興はますます深かりけり。

××××××
××××××

日ならずして、三郎兵衞は井伊直孝の取りなしにて、祿いと重く昇進し、家いと榮へ榮へたりとぞ。一篇の陳談、かきつらねてこゝにかゝぐ、これ亦新春の永閑けさなりけり。

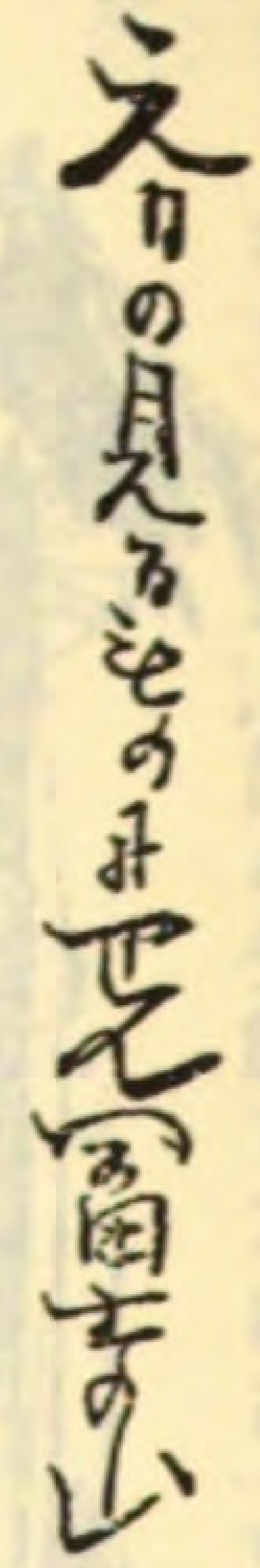
（完）

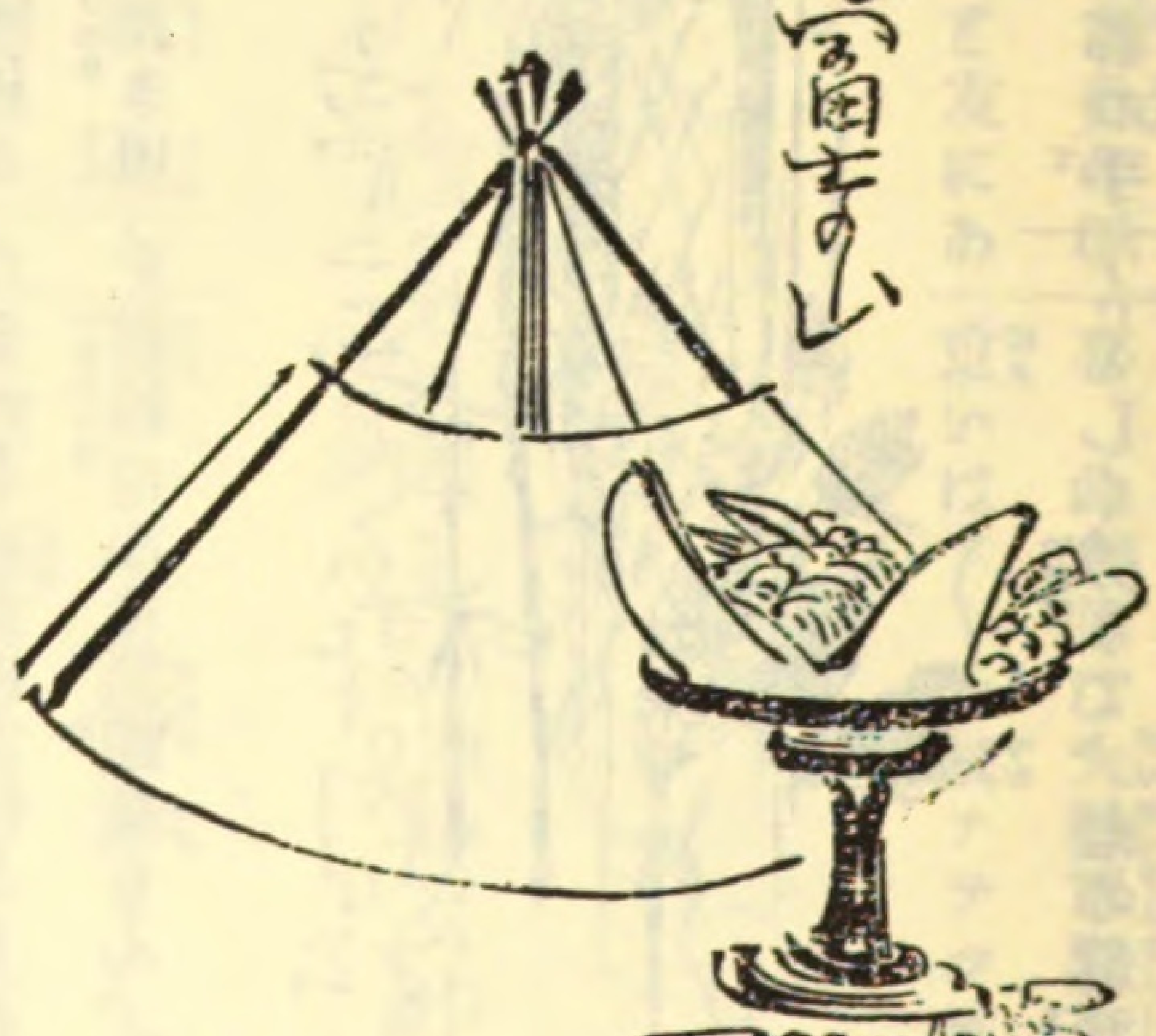
七福神歌合

桐迺舍女史

明らかに治る御代も三十とせと滿ち足ひぬる新玉の。

年立かへる賑ひに人の心も春めけど寒さは去年にいやまして、氷結へる夜もすがら好を盡せる小座敷に夜具の物はもうけながら、猶ねもやらず、黄八丈の小搔卷引被て埋火の霜を拂はんともせず孤燈のもとに身をよせて、手に持てる古今集を幾度か繰かへし、嗚呼何樣しても昔の樣な歌は詠ない併し今度の歌合には梅子さんに負ないやうに爲たいがと、又考に沈みしが白き襟元寒けなる迄首をたれ餘念なきは、雪をいたゝく若木の梅の匂ひ鉾る、風情なり、やゝ在りて庭の方に物の音の聞ゆれば少女は驚き、をや最早夜が明たかと徐に立て窓押開けば日影長閑に匂ひつゝ、春に先立梅柳あかぬ眺の下蔭に常に見馴ぬ一人の姫、海みどりの羽衣うるはしう重着ませるか何

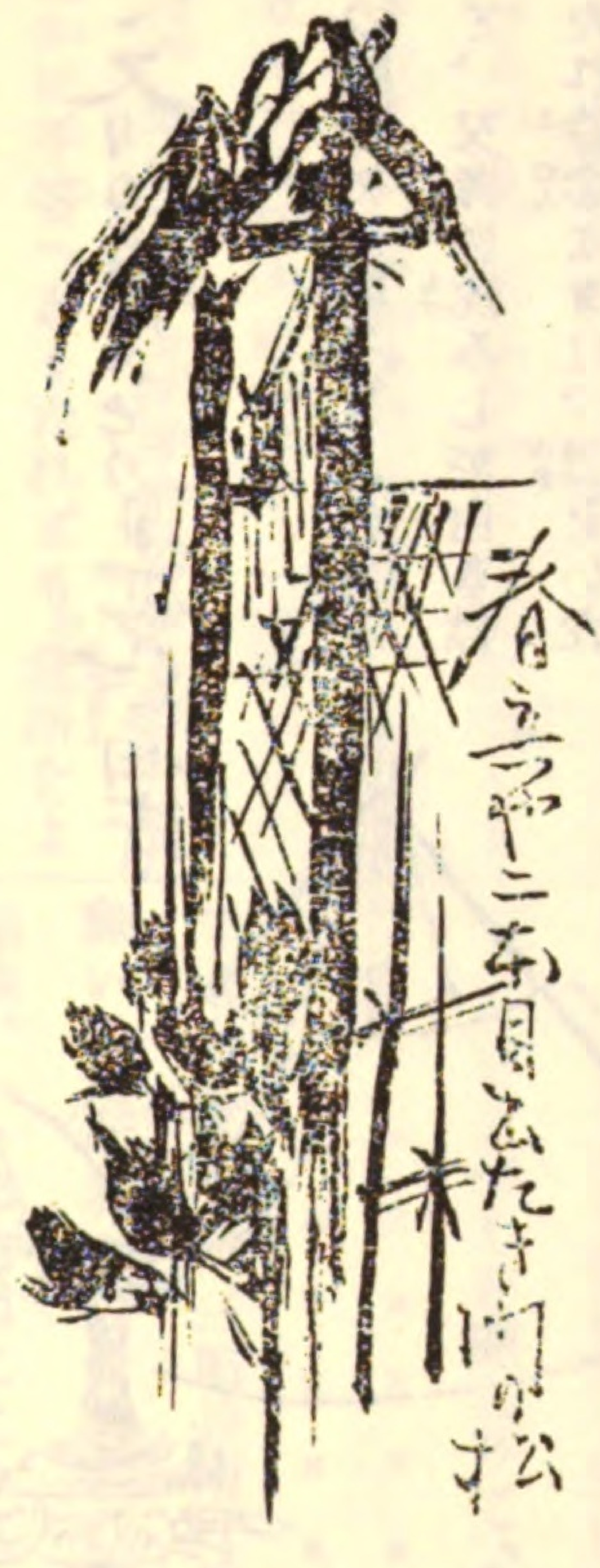




目出たき新春

やらん、口踊ッ、人待顔にたゝずみ給ふ折しも何處ともなく地の面に聲するを、あな不審と彼方見るに苔生へる龜の背に最むくつけなる腰の翁か、身には垢付たる荒妙の袖もあらぬをまとへとも心は清き者にやあらん、頓て水際により來しか姫を仰て額きつゝ、嘸かし待せ給ひつらんいざ此方へとすゝむれば、姫は嬉し氣に「ホヽ、と笑て否蛙よ翁の身の如何ならんと思ひしにも似す早かりしと、初音匂はす鶯のひらりと飛て龜の背に移り給へば蛙も喜ひ「姫と僕とは天地のたかひあれど花に鳴鶯水にすむ蛙の聲を聞けば生としいけるものいつれか歌をよま

さると、貫之大人のいはれしより、世にうたはる丶も厭ひ給はず今日の歌合の御供をも仰付られ候事何の幸か是に過ん、序ながら姫君に今一ッ申上度き事の候、そは外ならず最前より彼窓に顔差出して此方を眺居るは當家の主松枝伯の愛娘鶴子嬢と申者にて、幼稚き頃より敷島の道に志深く候へば渠をも御供に召給はすやと、怖る〳〵申出れば姫は甚く打喜びそは能も心付かれたり、自分も知らる丶如き山里に生育たれば都の手振も見習ふべく、まして今日の歌會にも判者は女神にましませと其他は皆男神なれは何となふうしろめたく思しを女の友得たるこそいと〳〵嬉しけれ、疾々是へとのたまへは蛙の翁も言ひ甲斐ありと喜びて「ノサリノサリと還出て窓の下に両手をつき嬢よ彼處に立せたまふは、鶯姫と申て春山に籠らせたまふ貴人の御娘にましますか今日都に、七福神の歌合ありとて俄に渡りたまへるか女の友得まさんとて、一向に嬢を召たまへを辭給はんも無禮ならん、いさ〳〵と急立は鶴子も何かは辭むべき只嬉しさの先立て恥しきをも打はすれ、引る丶まゝに庭に下り立池の水際に立よれば姫は甲斐〳〵しく勞りて、蛙の翁諸共に皆龜の脊に乗移れば、龜は緩やかに動くよと思ふ間もなく八重の霞を分けて龍の宮居に着にけり、實に人の世に異て朱の玉桓珊瑚の欄干瑠璃瑇瑁を鏤し御階のかゝり、黄金白銀の柱は光り燦然と輝渡るに三人は心を奪れて暫時たゆたふ、



目出たき新春

有様を徘鯉金魚は目早く見付奥に斯と告しにや待まうけたる七福神、端近く出迎へ毘沙門天眞先に立て「ヤア珍客おそかりし最早歌合の間に合ずと叱する如き大音を、笑に打消す惠比壽神昇沙門殿は先刻から負腹立て虎髯をビクビクヤツテ居らるゝが、それは自分の歌にある事我身の下手を棚に上判者を怨み失鱈と友にあたり散し、客人に迄無愛想は七福神に似合ぬ行ひ、夫に引替此惠比壽は君を轉々と負かしたも皆平日の心掛是か勉强の印といふもの、餘り嬉しくて君の怒た顔を見ると、をかしくつて〳〵アハ、、、、、、もう堪らぬと、頬を叩て笑ひこけたる傍より、布袋もにこ〳〵笑顔「コレサ〳〵惠比壽殿ソゥ君ばかり威張給ふな僕も大黒殿を美事負かして大勝利、朝鮮も支那も丸呑にした様で嬉しさか込上て耳かほてつて苦しいと腹つき出して自慢たら〳〵、大黒天を後眼に見やれば大黒も聞捨ならじと恕かと思ひの外に高笑ひ「イヤハヤ惠比壽殿も布袋殿も一を知て二を知らぬ大喜、此大黒は大敗軍點者の指揮て大袋を脊負せられ、重いは〳〵此奴アテツキリ重いツヾラの化物と、思つた時の氣味悪さ怖怖中を覗て見れば寶物が山程あつて打出の小槌は重荷に小付、これぞ福德の三年目負か勝といふ事を最初から、斯と承知で注文通り負たのだと一人ほく〳〵喜を見るにつけても腹立しう「モゥ勘忍かと毘沙門は持たる鉾を取出し打かゝらんとす勢ひに、狼狽止むる福祿神徐に出づる壽老人、年嵩たけに落付拂ひ「各々方は何事ぞかゝる目出


日出たき新春

度新年を、祝はん爲の歌合負くるも勝も一興なるに、思ひ〳〵の出鱈目から、爭論とは大人氣なし、我等二人は持なれば斯云にはあらねども、殊更今日は昔より世に隱れなき鶯姫と蛙翁の歌合を、試んと兼々樂み居られしならずや可惜時間を費さずいざ〳〵奥へと無理やりに毘沙門を引立つゝ辨才天を先に立て三人の客を案內すれば、殘る五福もまじめに成後へ添て奥に入、皆々元の席に付は辨才天も打喜び、再度文臺引よせて鶴子孃にかゝせたる鶯蛙の歌合を見たまへば

題は同　　松影映水

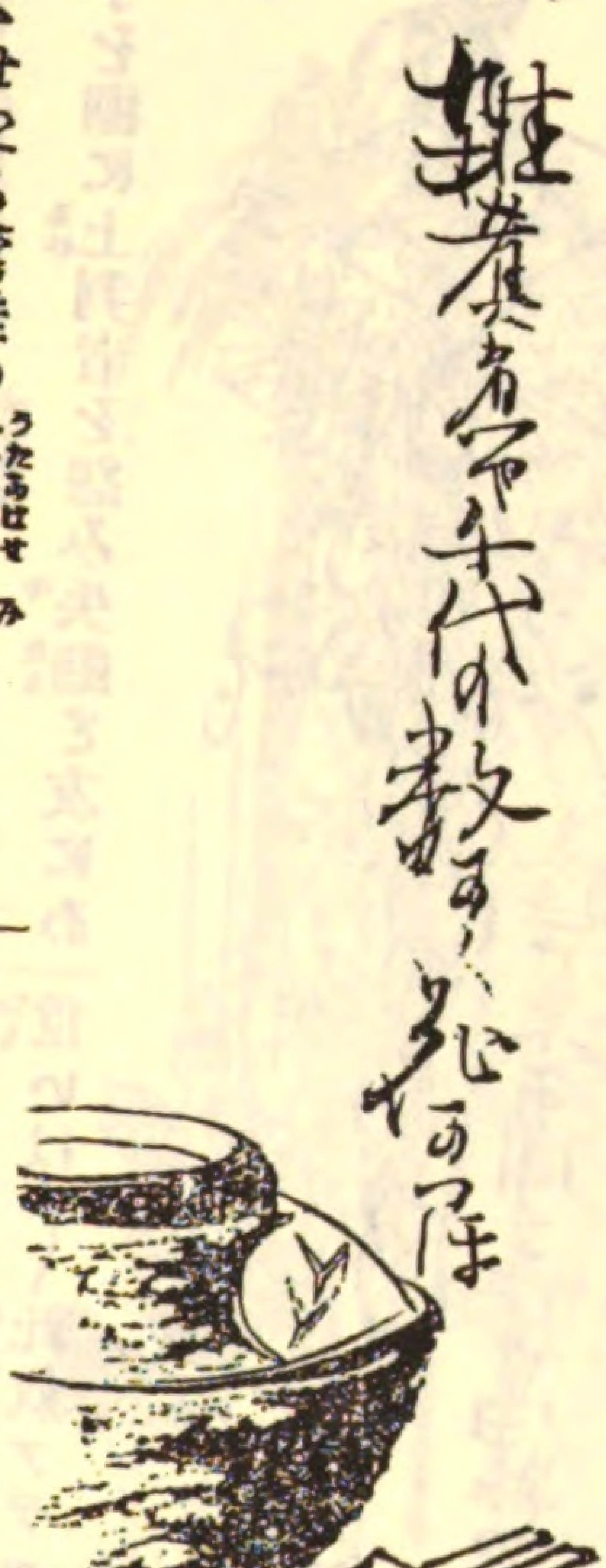
左　　　　鶯姫

君かため今朝汲そむる若水に
　松も千歳の影さゝけけり

右　　　　蛙翁

朝日影さすや小松の春の色の
　みちたらひぬる池の面かな

判　左上の句の心をうけて下に松も千歳の影さゝけけりとうたひ出られたるこそいとゆかしけれ

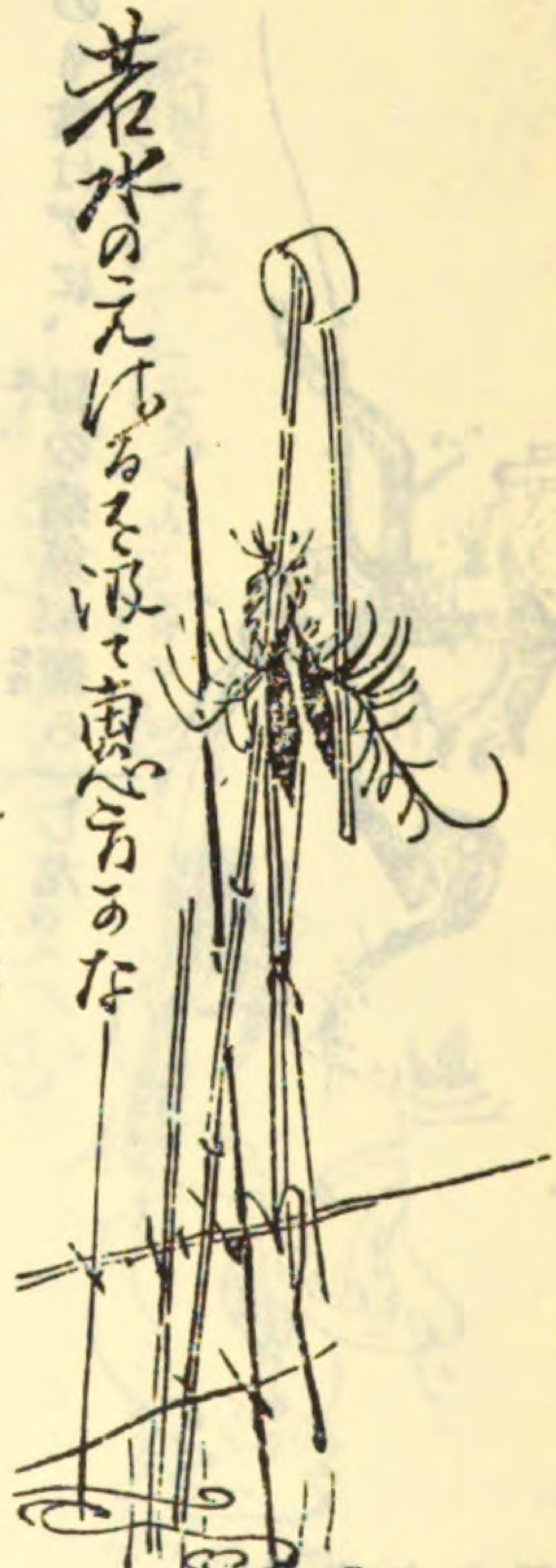


目出たき新春

判　右朝日影にのどけき御代の姿をうつしとめたる小松の色も池水と共にすみわたりて見ゆ此つかひはいとめでたき持たるべし

そのたまへば一同舌をまきて感じ入、鶯蛙は數多の賞品にあづかり禮申てまか出んとするを、辨才天は暫時とおしとめ是よりは無禮講にて新年の宴を開べし、妾

は琵琶を彈すれば鶯姫は唱ひたまへ蛙翁は囃方、鶴子孃は盃盤の事をとり惠比壽殿は飽丁役、持合の鯛を料理たまへ大黒殿は負たる罰として、六歌仙にちなみある喜撰を一ッおとられよ五福の神は御迎へ坊主と、皆役割も定れば文臺は盃盤と引かはりて盃の數重る頃、岩根によする徒浪の音に吹そう松風も御代の榮やいはふらむ、辨才天か掻ならす琵琶のしらべも面白し鶯姫も聲張上「御泊りならばとまらんせ障子も此頃張替て疊も此頃かへてあると、うたふにつれて大黒は踊間も袋をはなさず小槌を振て大うかれ、布袋は例の腹皷「打やツヾみの松吹風のとうたふ傍より壽老神御髯撫々「黒船に乘込八百八人と拍子ぬけしもをかしきに、福祿は長き頭を叩きながら「梅か枝の手水鉢と



うなり出せば何事も負ける嫌ひの毘沙門か「寅をふまへて和唐内と何が何やらメッチヤタチヤ蛙翁は愉快々々〱トはやし立てるに、鶴子孃もひとさし舞はんと飜へす袂を強く引く者あり、誰ぞと驚ろき見かへれば「御孃樣モウ梅子樣は御歌會にいらつしやいましたよ、貴孃どう遊はしたのといはれて始めて心付けは、夢は忽ち覺めはてゝ在りし宮居は影もとゞめず、床に掛たる七福神の一抽と讀みさしゝ古今集は朝風に浪打つのみ

目出たき新春

小説

おすみ

湖處子

寝るのも寝ずに、食ふのも食はずに、母の病氣が癒る樣にと、幼な心に神かけて、祈りし娘が心盡しは甲斐なく、病疾は日に月に募り日に月に重なりて、母はとう〳〵哭いても叫んでも復らぬ人となりましたが、其臨終の際に、お母さんが亡くなつた後には、ようお父さんの言ふとをお聞きなさいよ、かりにも曲つた根性を出してはなりませぬよ、心さへすなをに保つて居たらば、これより後如何な苦しい目に遇ふとも、神樣は必ず御助け下さるに間違なく、妾とても神樣の御使となつて、陰ながらお前の身を庇護ませうほどにとくれ〴〵も誡しめたりし、その遺言を娘はよく守つて、父によく仕へ、人に優しく、雪の日も雨の日も墓詣りには必ず行きました。



目出たき新春

かくて秋も過ぎ、冬も暮れて、春の初めつ方、父は後添の母を迎へました。それに連娘が二人ありましたが、孰れも外見は美しいが、内心は夜叉の樣な女でありましたから、母子三人がぐるになつて、毎日〳〵娘に辛くあたりますので鶯歌ひ花笑ふ時節といひながら、娘は涙の絶ゆる隙はありませんでした。

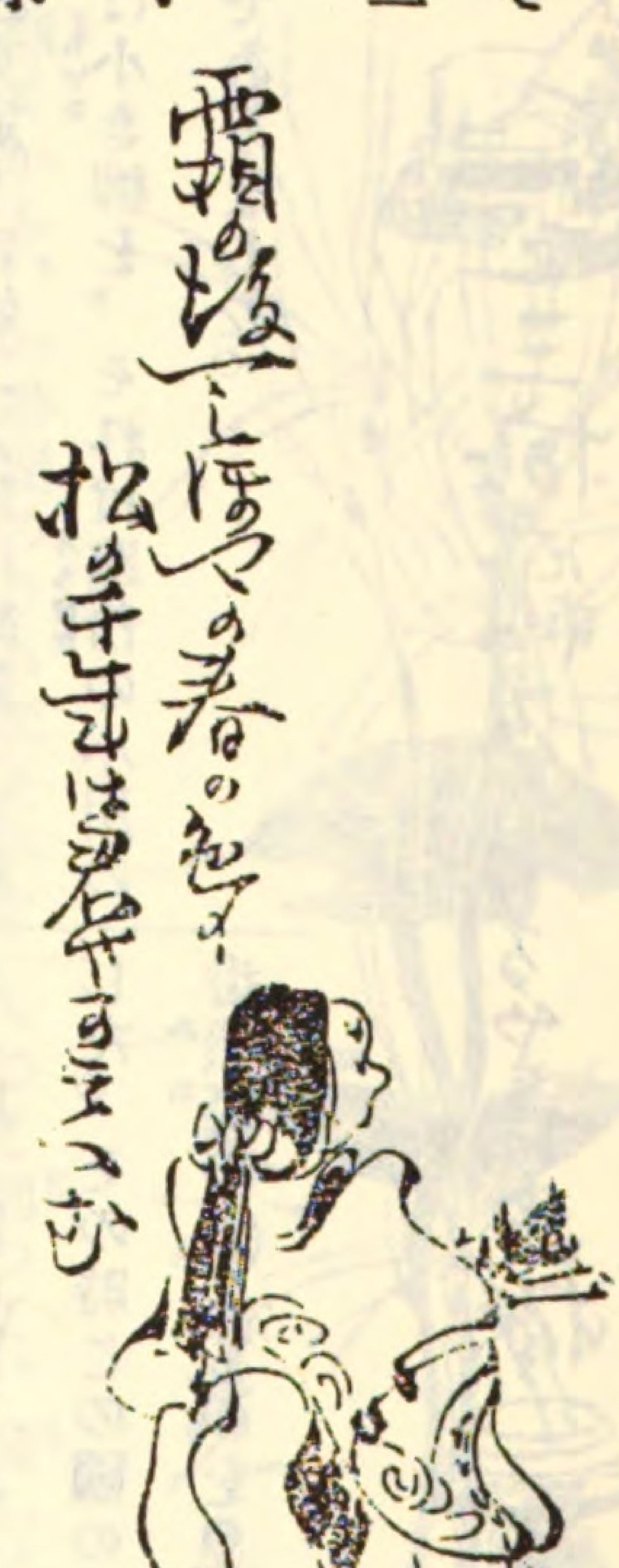
ある日繼母は娘を呼びよせて、

本當にお前見たやうに何一つ出來ない穀潰しはお爨女に限りますよ。何處にいたつて稼がないて食ふものはありやしない、さ、さつさとこれからお飯でもお炊き、

と云ひつゝその着てゐる美しい衣服は皆取ちまつて、汚ない薄つぺらなのと着代へさせて、その憐れな姿を見て三人口を揃へて、

よ、よ、出來ました、美事なお姫樣が出來ました、と囃しては笑ひました。

それからといふものは、それ水を汲めの、それ洗濯をせよの、それ門を掃けの、それ草を摘れのと朝から晩まで追ひ役ふばかりならばよけれど、夜には寐る團布さへあてがひませんでしたから、雪嵐のびう〳〵と冴ゆる晩などは、竈の中に這入り、灰の温氣で僅かに寒さを凌ぎました。それだもんですから磨けば光る玉の顏も、垢とすゝとで眞黑くなつたのを、よき笑ひ草と三人は氣味よく思ひ、色の黑いから名をおすみと呼ぶ樣になりました。



目出たき新春

ある日父は都見物を思ひ立ちました。其時お前達には何の苞苴を買つて來ようの。

と、先づ繼姉二人にたづねました。

すると姉の方は縮緬の羽織、妹の方は銀の簪をたのみました。

お前は

と次におすみにたづねますと、

妾には何にも欲しいものはないの、たゞもし歸り路に柳がありましたら一本堀つて來て下さいな。

と云ひました。

さて父は京に上つて注文通りに姉二人には縮緬の羽織と銀の簪、おすみには小さき柳を、それは路傍の小川の堤から堀つて來たのでありました。

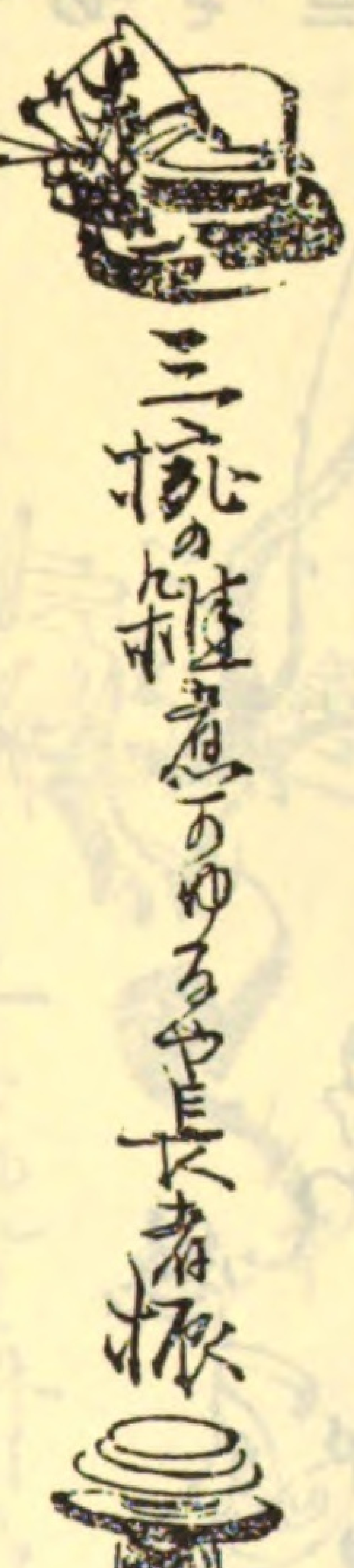
おすみはお父さんありがたうと禮を云つて、すぐとそれを母の墓に持つていて植えました。そして泣きました。その涙が地を潤して段々高く柳は伸び段々低く其絲はたれて、今は雨の様に墓の上になびきかゝり、朝な／＼涙の様な露を墓に濺ぎました。

おすみは日に三度は必ずこゝに泣きに來ました。そのつと一羽の奇麗な鳩が柳の枝にとまつて娘の願ふものは何んでも持て來て呉れましたから、これはもしやお母さんが鳥となつて、妾を庇護て下さるのではないかと、おすみが思ふたのも無理では御坐いません。

ある時、時の國王が三日か間の舞踏會を御催になりました。その時この國の美女を盡く召し集めて。其中一番顏姿のよきものを皇子の妃にとりたてんとの御勅が出ました。

これを聞いた繼姉二人の喜びは何んなでありましたらふ。それ縮緬の羽織それ銀の簪と大騷を演りました。

これを見てはおすみも娘心にぢつとしては居られない、姉と共に行きたい、行つて見たいはやま／＼なれど繼母に叱責られるが怖さに、はやる心を少時は押へて居ましたが、とう／＼こらえかねて、妾も一處にと



目出たき新春

願ひました。ところかなか〳〵聞ところのさわぎか、おや〳〵呆れてものが言へない、よう鏡と相談しておいでよ、王樣のところへ持て行かれた顏かよ、妾でさへその三年垢にはいゝ心持はしないのに。それにまたお前は着物をお持ちか舞蹈がお出來か、

と頭からがみ〳〵と奴鳴りつけました。

それにも關はず一しよに〳〵と願ひましたので、こん度は漆膠い人だね、じや今一升の小豆を庭に撒くから、一時間のうちにそれを拾つておいで、そしたら連れて行うと難題を持ちかけました。

おすみはすご〳〵と庭に下りて小豆を拾つて居ますと何處よりかかの鳩が飛で來て加勢をしましたから、一時間經ないうちに拾ひあげてしまいました。

これで舞蹈會へ行けるとかと、おすみはいそ〳〵とそれを繼母の前へもつてゆきますと、繼母はもとより連れて行く氣でこんなことをさせたのではありませんから、



目出たき新春

いくら豆拾が上手でも舞蹈も出來ず着物も有たぬものは行くとは出來ませぬ、

と言ひはなちしまゝつと起つて、飛んだお邪魔で遲くなりました、さあおいでと二人の姉を連れて出て行きました。

一人とり殘されたおすみ、そのまゝ墓場に馳行きて、ワッとばかり、墓の前に泣き頽折れました。

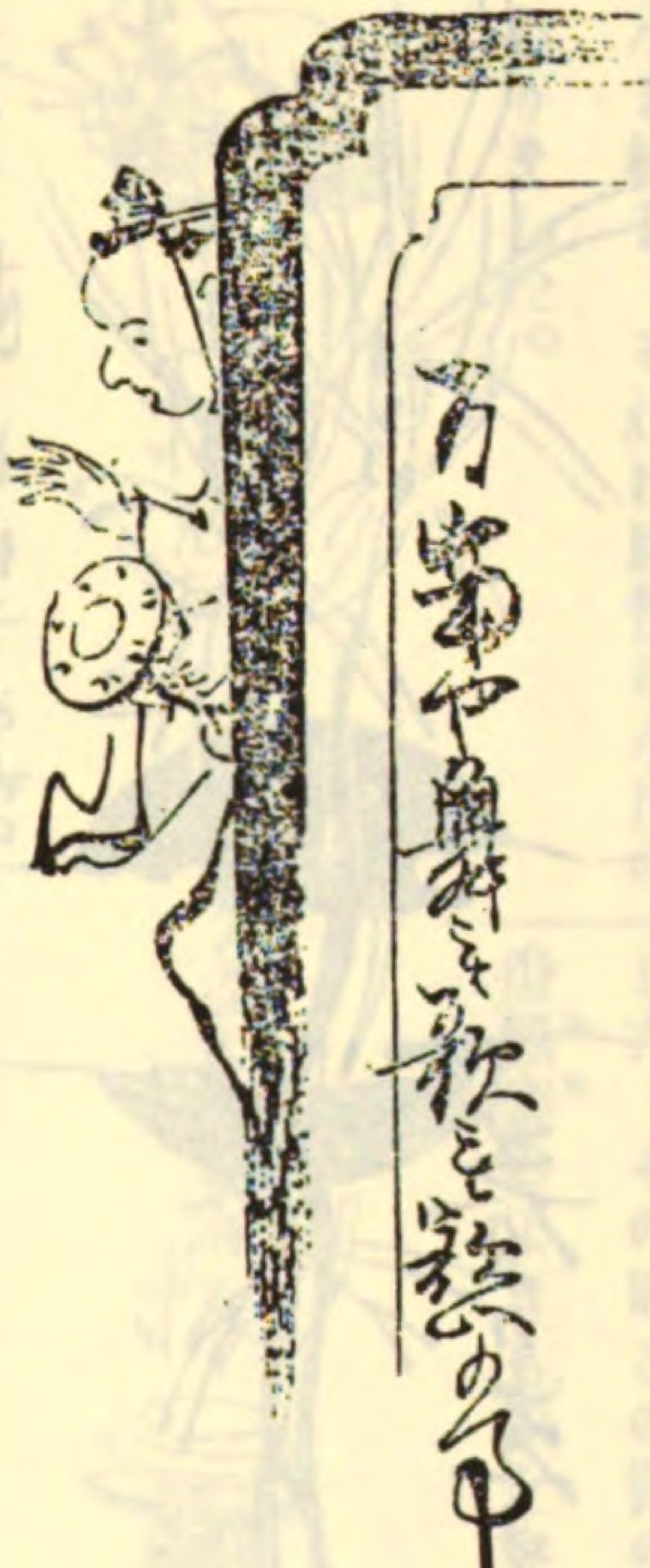
すると例の鳩は絹盡しの衣裳、金銀盡しの頭裝一揃

ひを喙へて來て柳の枝にかけました。

おすみは飛び立つほど喜こび手提くそれを着て舞蹈會へと急ぎました。

ところがその裝束のあまり美しさに繼母も繼姉もどこかのお姫樣とばかり思つて、これがおすみであらうとは夢にも知りませんでした。

さて舞蹈會は始まりました。皇子はおすみとばかり言葉をかはされおすみとばかり舞はれました。そして舞ひどにおん身こそ我伴なれと歌はれました。



日出たき新春

かくて舞蹈會も終となりましたから、繼母は娘二人を連れて歸つて見ますと、おすみの姿が見えません。けれどもまたお墓詣りでもしたのであらふと、心にもかけませんでした。ところが晩になつても歸りません、明の日もその明の日も歸りませんので如何したのかと、大概のものならば一騷やるのが當前ですけれど、繼母は却てこれを幸と思つて尋ねもせずに放棄つて置きました。

ある日皇子は新婚の披露とて市中巡幸を仰せ出されました。その時の市中の混雜は一通りでは御坐いませんでした。どんな美しいお姫樣であらふと老、弱、男、女、我も我もと押しかけ、今か今かと玉輦の通るのを待つて居ました。待つ間程なく輦は徐々とやつて來ました。思ひしに違はずお妃樣の美しさは迦陵頻迦もかくやと思はれるばかりでありました。その美しい妃樣の肩の上に一羽の奇麗な鳩が來てとまり

ました。

これがおすみと繼母は覺ったでしようかいや〳〵あまりの美しさによくその顏を覗あぐるとは出來なかったでしよう。

着衣初め

母方の紋めづらしききそはじめ　山峰
縫ひそめや柳もたちて片相手　仙艸
うみつむぎ縫初ややかてきそ初　久眞
着衣初春かぜうぐくかつきかな　古音
うるわしや人相應にきそはじめ　貞氏
母の手ないたゞくやこの着衣初　龜水
我がつまの引揃へたるきそはじめ　三人
晴や紫染をきそはじめ　政顯
あなうれしゆきたけの足る着衣初　百人
まつ程に春は我家きそ初め　祇曲
うへつ方かくや御所染きそ初め　行榮
うなひ子が手巾振袖きそ初め　矢名

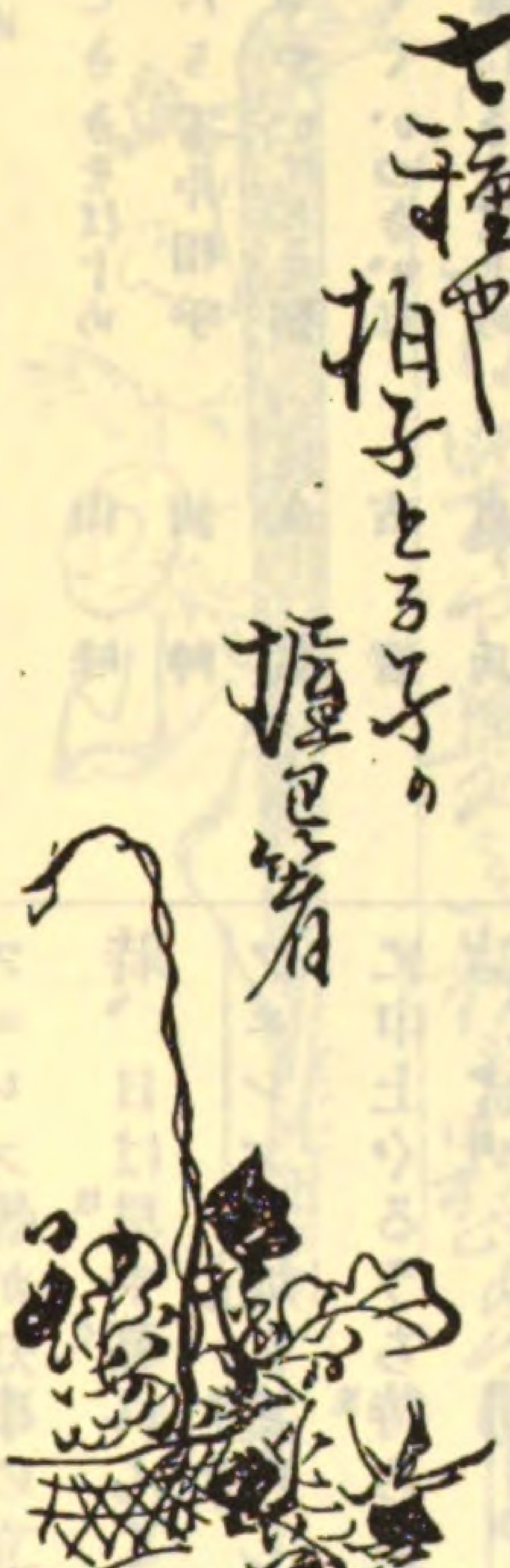
談叢

勇しき孝子（四）

松ケ枝女史

フェレブ等が知事の立派なるカチァの宮殿に着した時、日は早や暮れんとしてありましたアシユメットはフェレブを城に案内しましたが先づその日の光景を父に申上ぐるうち待ち與れとて誠に華美に飾り立てた一室に通せましたフェレブは價貴き安樂椅子に倚りながら己が頭を掌上に載せて切りに部屋の中央に据えある大理石の噴水器の冷しそうな風態を見つめて居りました、さて思は何處に走せ居つたでムいましよふ、今彼を圍達して居る華美は彼が思の種ではムいません今彼の思を苦しめて居るものは數年來彼が胸に藏しある秘密でムいます

余り默想に沈んだ爲め戸の開かれてアシュメットの入り來つたをも知りませんでしたアシュメットはフェレブが思に沈んで居るを怪しみましたが靜かに手を彼の肩にかけて「フェレブ、父上があなたに逢ひ度いとの仰だから」と申ましたフェレブ飛び上つて直ちにアシュメットに從ひました美くしい幾多の部屋を通りぬけた後遂に知事の居間に到りますると知事は獨り軟かき絹の褥にもたれかゝつて優に烟草を吸ふて居りました



敬禮を表して已が前に立つて居るフェレブを親切に見て居りましたが漸く口を開ひて「よくお出であつた、アシュメットはあなたに命を救はれたと申ましたがあなたの親切は必ず報じましやう、先ず坐して恐れなくあなたの過去の歴史をお聞かせなさい乃公は知事であなたの友人です」

アシュメットは無理にフェレブを絹の褥の上に坐せしめて

「父上はあなたに親切しやうと思ひなさるのですから何も恐るゝ要はありません」とその耳にさゝやきましたフェレブは目を擧げて見まするると果して何の恐るべきものも御坐いません知事イブライムは至て優美な風采の人品で鬚はなが胸まで垂れて居りました

「主君」と思ひ切つた音調で申ました「私は何も格別なこと致しませんでした御子息は充分あの賊等の相手に成つて勝たれたでしたろふ私が居らずと御子息は誠に勇しく戰はれましたから」

「そうでしたか、戰ひましたか、あゝそうでしたろふ、彼

は若い牡獅子のやうで親の顔にかゝるやうの事は致さぬ筈ですが然しあなたの扶けが折よくあらなかつたなら或は今は命がなかつたのかも知れません、何がさて、あなたはギリシヤ人ではありませんか、あなたの両親は誰ですか」

悲愁の色が俄かにフェレブの顔にあらわれましたを見て取つた知事は急いて「あゝ両親がないのか」と言ひました

フェレブは悲しげに答ひて「主君、両親は存命ですが死よりも悪るい奴隷の境遇に居るのですと申ました

「それは又なぜか詳しくその理由をお聞かせなさい」

フェレブは辛じて己が悲痛の思を制しながらその両親や自分の捕れたこと奴隷市場の恐ろしかりし状況又善人メカエル、サントのことまで凡て過去の歴史をもの語りました

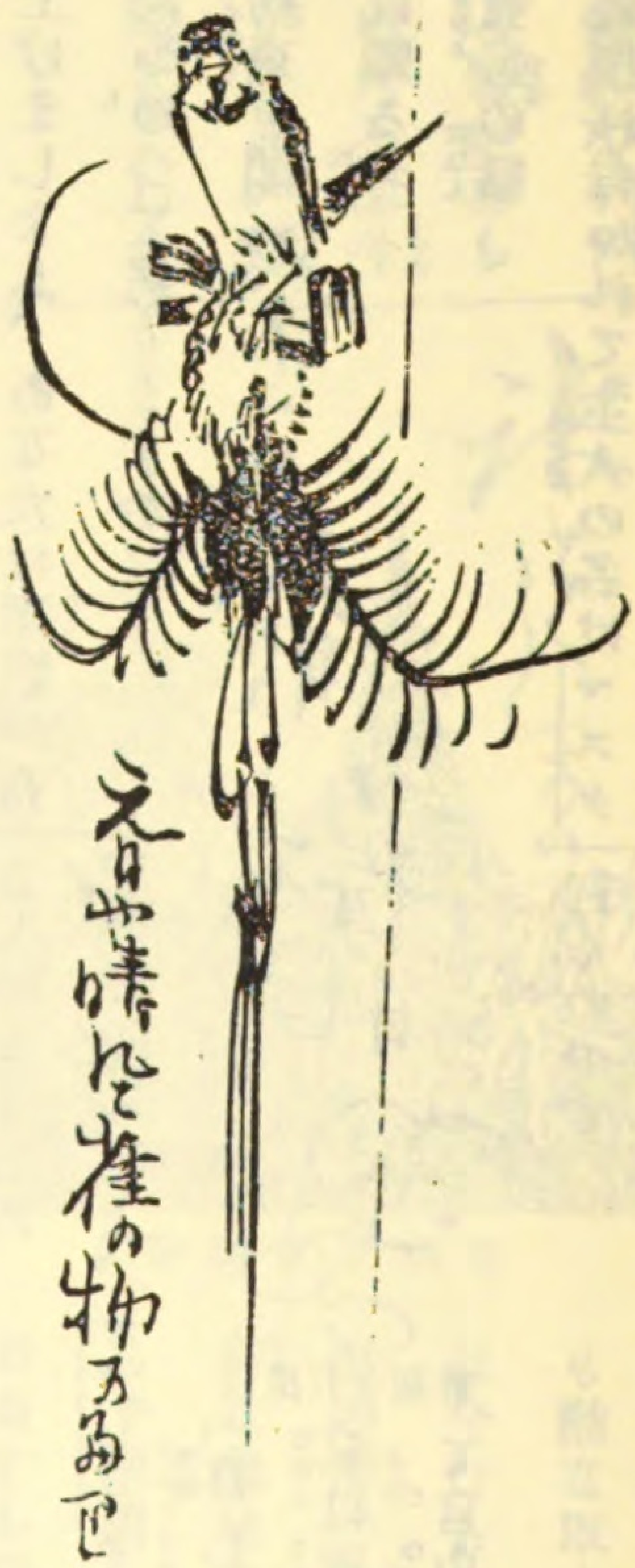
「その後両親のことは何か音信がありましたか」

「何もムいません」、

「何か尋ね出す方便でも試みたことがありますか」

「否何も試みたことがムいません私の養父は貧窮で何もすることは出來ませんし他には何の友人とても持ちません……友は皆カンデヤを去りました、私は只だ時機を待つのみです私が大人となつたなら何かすると出來ようと信じます今では少しの金を儲けることが出來ますか得る金は皆貯蓄して後日両親を償ふ料に供へて置きます」

フェレブは涙を以てその話を終りましたアシュメットは

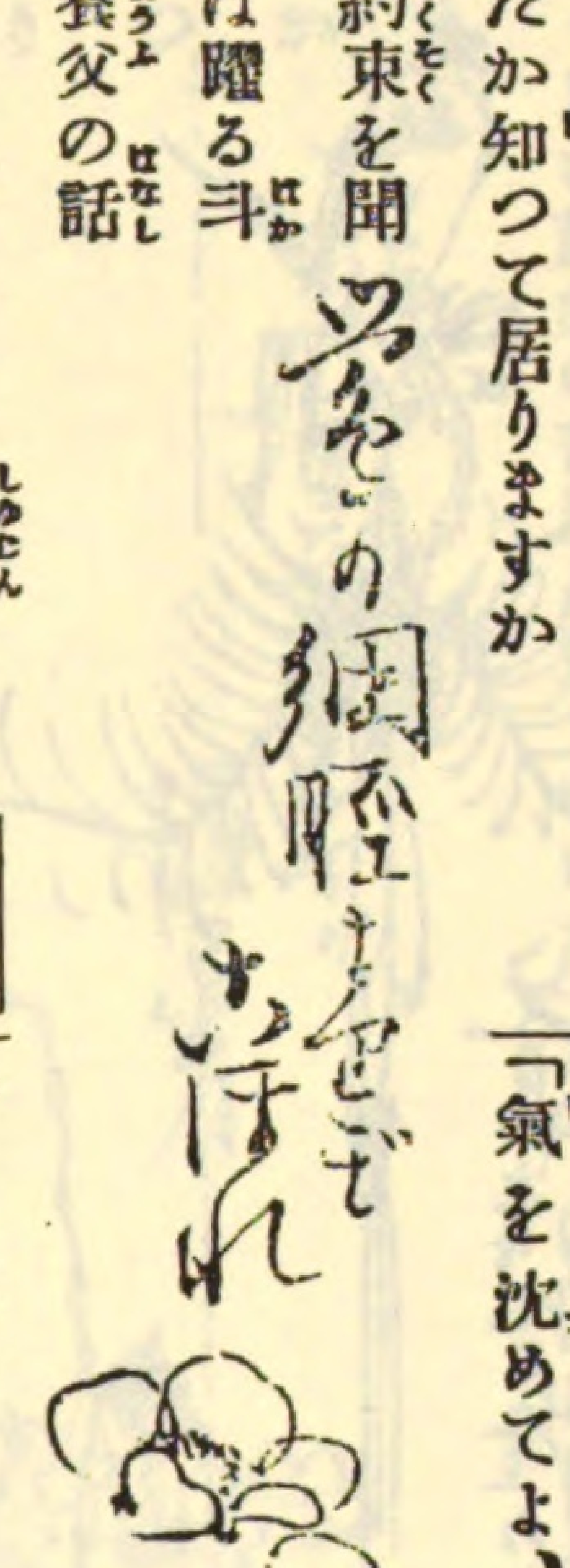


目出たき新春

彼を抱いて同情を表はし横柄な知事すら打たれた感情を蓋ふことは出來ませんでした彼は不思議そうにフェレブを見つめて自分のながき鬚を捻りながら申ました「アラ神」は必ずあなたの兩親を守て居つたでしよふ必ず再會の期がありましよふ神と命に誓つても必ず私は及ぶ限りの扶助を上げましよふ、あなたは兩親が舟で何處に携れ去られたか知つて居りますか

知事の望みあるこの約束を聞き得たフェレブの心は躍る斗りに思はれました「養父の話には兩親はバグダドに携れ行かれて主人の名はマスタファ、コドセと申大そう裕富な商人なそうです私は兩親を奴隷から救助する外何の望みもありません」

知事は切りに感じた樣子で「あゝ誠にそれが孝子の道は、心配なさるな、もし未だ生きて居るならば必ず自由にせられましよふ



目出たき新春

第五章　力ある保護者

フェレブは今斯く思はず降り來つた幸運に心酔はされて知事の宮殿を如何にして出たか覺がありません泣て笑つて飛び跳ねて飛ぶが如くに善メカエルの處に歸り己が兩胸に老人の頸を抱て聞き取られぬ五六の言葉をさゝやきました

「氣を沈めてよ、フェレブまあ何事が起つたのだ」

「喜しいことなのです、父さん、私は兩親を尋ね出して鎖を解いて自由に幸福にして携れ歸るに行くのです

メカエルは驚いて童兒の顔を見つめました何故なれば數年この方互に兩親の噂さをした事がありませんでしたから、

「お前夢を見て居るのだろふ、どうしてそんな事が出來るものかそれにバグダドに行く金も何處から來る目

當もない誰も扶けて呉れそうな人も知らないから」と

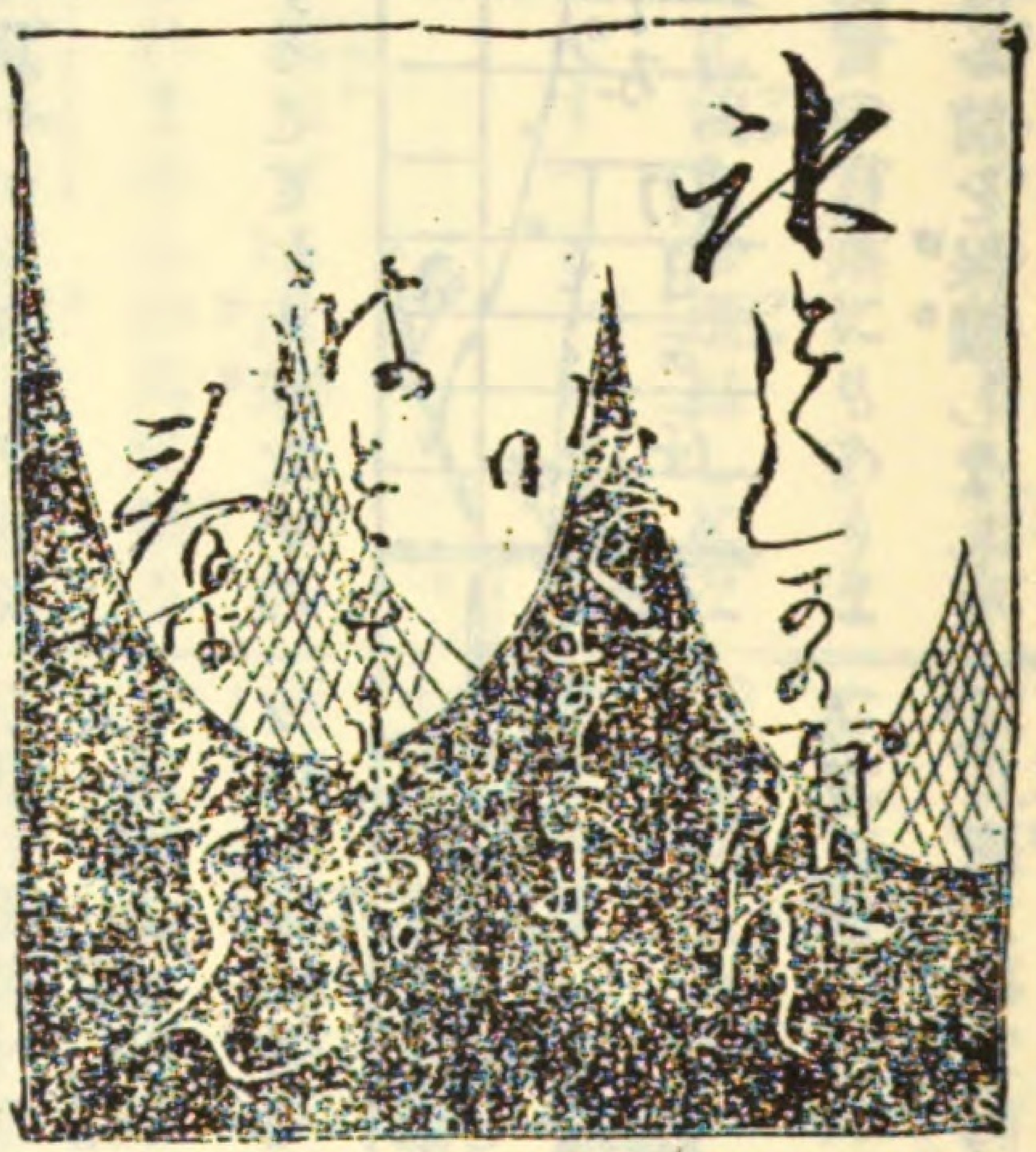
メカエルは氣づかはしげに申ました「父さん知事が知事のイブライムが、あの方は大したお金持ちじやありませんか………私の友人です」

「知事?」とメカエルは驚て叫びました「知事がどうして憐れなギリシヤ人の子供の友となる筈があらふお前どうかして居るのだろふ今夜はまあ早く寢牀に入りなさい明朝もつと眞面目な話を聞きましよふ」

フェレブは自分の感情を抑へて漸くその、アシュメットとの邂逅の始末から知事との對話の事まで洩れなく告げましたメカエルは深き然し悲しき感を以て聞き居りましたが頭を掉つて何も申ません

「父さん何か云て下さい喜しいじやありませんか私が再兩親に逢れるのです奴隷の位置からお救ひ申して」

「否」とサントは答ひました「乃公の心は誠に悲しいどうしてお前が海上の危險を侵したり燃ゆるやうな沙漠を横ぎつたりせられりよふ、それに沙漠の種族等は



目出たき新春

クリスト教徒とさへ見れば犬よりも酷な取り扱をするものを、お前は今行ちやならぬ、成人するまで私の傍で待つてお出で、お前の孝行な志はまことに感心するが今行ちや兩親を救はぬ斗りでないお前の命すら危く思はれる、私はお前を眞の子のやうに愛して居るのだから今お前の云ふことに一致は出來ないまあ暫く忍耐して待つてお出で」

フェレブは温かき恩愛の情を以て靜かに老人の手を握り「父さん私はあなたを離れねばなりませんどうぞ私

を祝して下さい神は私を守りましよふ全能の神さへ共にいませば何の恐るゝ處もありません」

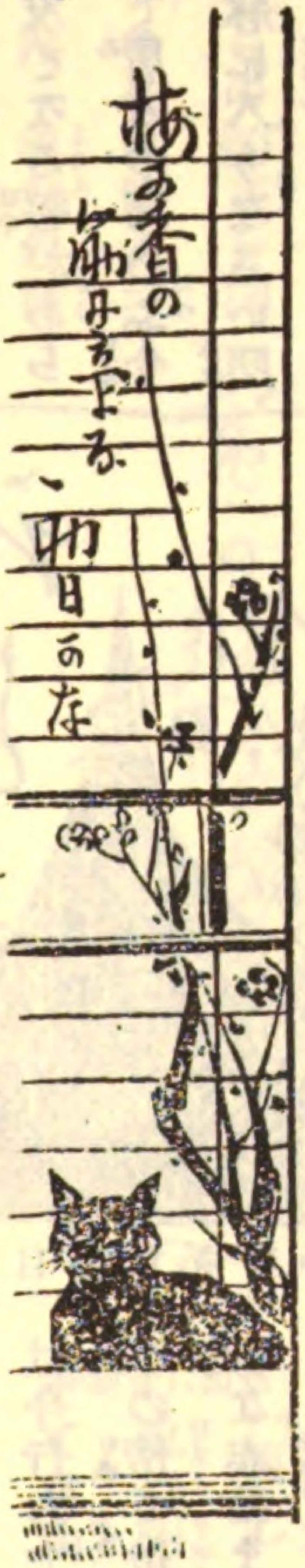
メカエルは勤氣いよ／＼烈しくなつて來ました「どうしても四五年待つて居るがよいそのうちに兩親の死生も取り調べよう、奴隷の鎖は至て重いから果して堪えられたかどうか分らない」

「だから父さん私は一分も躊躇することが出來ないのですどんな事があつてもよいからどうぞ遣つて下さい」

「それじや安全に行きなさい神はお前を保護しましよふ」メカエルも詮方なく申ました「お前の思ふ所は道理だ私は私の悲痛に打勝ちましよふ、もし私がこんなに老衰して弱くなかつたなら一所に行くのだが已むを得ない、どうか安全に行き着いてお前の兩親無事な對面させたいものだ」

「父さん私は必ず成功するだろふと思ひます神は私を扶けましやう然して母さんの喜悅の涙が充分の報酬と思ひます」

彼等は最夜中頃まで語り合ひました翌日晝過ぐる頃勇しき蹄の音が聞ゆると共に立派な扮裝の幾多の人がメカエルの小さな家の前に立ち下りましたが中にフェレプと同年輩頃の美くしい一少年は一人急いで戸を排して入りました



目出たき新春

「アシュメル？　父さん此の方が私に今度の幸福を下さつたのです」と叫びますするとアシュメットは笑ひながら「そうしてこの方の扶けがなかつたなら私は二度と親切なこともすることが出來なかつたでしたろふ御老人、お目にかゝつてうれしく思ひます」

メカエルは低く頭を垂れて會釋しました「こんなむさ苦しい處によくこそ御入來下されましたどうぞお坐り下さいませんか見苦しいかどは幾重にもお免下され私共は貧窮ですから」

「世の寶には貧窮だか德義の寶に富んでゐらるゝは何よりです、德義は最上の寶だと聖賢の言葉にもありますから、フェレブ父さんがあなたに使をお遣はしになりました御老人にも逢ひ度いそうです」とアシュメットは答ひました

知事の望みは命令ですメカエルは從はざるを得ませんでしたメカエルは知事の親切を恐れませんが馬に乘ることのみは遠慮志ました然しアシュメットは聞きません

メカエルは柔順な美くしい馬に乘せられアシュメットとフェレブは荒馬に乘つて靜々と市中を通りましたに人皆驚いて老人サントの知事の介息の傍に乘り行くを怪しみました

一同知事の宮殿に着きますと最も丁重なる接待で愉快にせられました後知事は徐ろに口を開いて優しくメカエルに言葉をかけました「あなたは實に聖賢の道を蹈んで居る苦しめるものを慰め弱き者を扶けるといふは誠に立派な事だ何故モハメットの信徒でないだろふ、あなたは貧に苦んでもキリスト敎を止めないのか」

「主君、モハメット以前にキリストは樣々な正義を敎ひになりました私は死んでも信仰は曲げません」

知事は靜かにフェレブの方に振り向ひて「お前はまだ兩親を尋ねやうと思ふて居るか」と問ひましたフェレブは冷しき眼もとに勇氣を含んで「はい、全く決定して居ります」と答ひました

知事は暫し默想に沈みました人たちはその想を妨げてはならぬと思ふて默して知事の發言を待つて居りますると數分の後にかく申出しました

「お前は誠によい子だ然しバグダドに行く道は誠に遠

いし沙漠は至て危險である寧ろお前は此處に止まつて私が人を遣つてお前の兩親の安否を探索さするを待つて居るがよかろふ、

フエレアは顏も蒼く變じて知事の足下に身を伏せて是非遣つて呉れと申ました、知事は靜かに答て「まあ沈付て坐してお出で何お前の願を妨げる處じやない何處までも親切に世話しよふと思ふのだがアシユメツトはお前を愛して兄弟のやうに思ふて居るから私もお前を子のやうにしたいのだもしこゝに止るなら凡ての榮華を盡くさして立派な馬も買つて上げよふお前の未來は天の星のやうに輝くだろふ」

フエレブは頭を掉つて「私はアシユメツトを愛します然し主君私はこの世界中で兩親よりも勝つて愛する人はありません」と答ひました知事は猶語を繼いて「然し兩親のことは充分世話をして遣のです私の力で必ず自由にして上げることが出來やうと信じます、

フエレブは簇がり來る感情を抑制して申ました「主君のお親切は誠に有りがたく思ひますがどうぞ私の心を推察して私の心を立てさして下さい主君のお遣はしになる使の人は或は沙漠や海の危險に恐れて中途から歸つて來て「尋ぬる人は已に死んで居る」と僞るかも知れません或は又預けられた金を以て遠くに逃げ去つて再び御前に歸らんかも知れません然しもし私が行きますならどんな危險も恐れないで必ず兩親の繩目を解き歸りましやう」

知事もフエレブの決心の動すべからざるを知りましたから遂に「行け」と申ました「或は再會の期がないかも知らぬがもし再びこの地に歸ることがあるなら必ずこの宮殿にお出なさい、何時でも喜んで迎ひましよう」

知事の命に依り侍士は立つて一個の立派な卷物を持ち來りました知事はそれを受けてフエレブに渡し「これはトルコ帝の押印のある令書だからこれさへあればお

前が何處に行つても丁重な取扱を受くるによい然しアラビヤ人の前には何の役にも立たないが「アラー」はお前を保護なさるでしよふ、海岸に舟が用意してあるそれはラダクアまで行くのだがその後はお前陸を辿らねばならぬ金は充分に用意して遣るがもし何か困ることのある時にはバグダドでその紙の上に書てある名の人の處に行けばお前の望むものは何なり與えらる
る、その卷物を失はぬやうにしてお出でそれに勝つた扶けは上げることが出來ないから、何の私に禮云ふ要はない悴の命を救ふてもろふた恩があるものを、キリスト敎徒はトルコ人を殘酷無慈悲と思ふて居るらしいが中には德義を重んずる人もあるまづそれじや出立なさい」と申ました

フェレブはものいふことが出來ませんでした只だその眼を以て無量の感謝の意を顯はし身を知事の足下に投げ伏せて衣の裾に接吻しました知事は優しく彼を見居りましたがメカエルに振り向ひて

「友よあなたは年老ひて休みが必要だ、私はあなたにも恩がある、もしあなたがその憐な子供を扶けなかつたなら私の息子の命を救ふの人もなかつたのかも知れない、行つて勞働を休めなさい私の藏庫から年々あなたを養ふ入費を支出させましよふ先づ最初にこれをお取りなさい」

知事は嚴かな風采以て奥に入りアシュメットは靜かにその客人等を城外に導きましたアシュメットは價高き指環をフェレブの指にはめさせながら情深く申ました「行けよ兄弟「アラー」は保護なさるでしよふもし再び歸り來るなら必ず私の許にお出なさい私も始終あなたの事を思ひましよふがあなたも私を友人と思ふて下さい」

フェレブが答をせぬうちにアシュメットは何時しか行き去りましたフェレブとメカエルは馬に乘つて彼等の小

屋に歸りました

「實に知事イブライムは私共はトルコ人といふて恥しくないほど善人だと申したが彼の方はキリスト教徒といふてよいほど價値のある人だと思はれるとメカエルは申ました、

群書解題

榮花物語　　欲東老人

粲然として色美しき、藤家全盛の時に於てや、秀才一時に輩出し、和歌に漢詩に、國文に、漢文に、各々獨特の長を競ひ、所謂王朝の文學なるものを、後世千歳の今に傳ふ、貫之や、道眞や、順や、業平や、清行や、金岡や、皆是不世出の英物なり、唯其一人のみあるも、優に以てこれ多とするに足る、古今集や、伊勢物語や、三代實錄や、延喜式や、皆是文界の珠玉、單に其一のみなるも、亦其時代を飾るに足る。况んや其多きこと彼の時の如くなるにおいてをや、誠に王朝の時代こそ日本の歷史中神武東往の初めより、明治の今日に至るまで上下二千數百の年所を通じて實に唯一の盛世なり、豈に盛んなりといはざるべけんや。殊にとりたてていふべきは是等濟々たる多士と共に、花の如き名媛また此時に輩出し、共に錦繡のやさしき想を、うるはしき彤管の運びにあらはし、艶を詞藻に競ひしことなり。今更に云ふさへ已に事ふりたり、紫清二女の如きもの、千歲又とあらざるところ、唯これ日本のみに限らず、洲の東西時の古今、問ふところなし、撰ぶとなし、何れにかそれ其比あるべき。式部が、駘蕩花を咲かす春風の如き心は源氏の五十四帖となり。納言が蕭々紅葉を吹く、金風の如き靈才は、枕の草紙の詞となる、文界の雙美、兩者共にこれ徑尺の夜光、絕世の寶とはいふべきなり。さればにやいづれも後人にもて囃され、其當時

以來今に至るも、いよ〱其光を益して衰ふことなく、堂々たる六尺有髯の大男子、是を解し得るを以て人に驕る、いはゞ婦女の筆の端なり。さるを斯程までに重んぜらる、注釋の如き、源氏は五十種以上に及び枕の草紙又三十種以下にはあらず、吾人それ如何にいふてよきや、更に賞讃の言を知らず。

赫々たる日、中天に懸る、滿天蒼々として見るものなし、されども是數百萬の恒星は、處せきまで畵もあるなり然して其夜に於てのみこれを見るは、これ其光を大ひなる大陽のために奪ひ去らるゝが故なりけり。王朝の女學壇、我これに似たるものを見る。文界の大太陽、紫清の兩女あらざりせば茲に一種の光を放ち、大ひに人の目をひくべきものを、如何せんいづれも共に二女に蹴押され比較的其名の高く上らざりしは、實に其人の爲に惜しむべし。斯る人それ一人ならず、然して其數多き中に於て、我は第一に赤染衛門を推さんと欲す。

金光燗々たる源氏物語、銀色皓々たる枕の草紙の外に立ちて、たとへは素鐵の色麗ならざるも、却て實用に富めるが如く、着實一つの浮華なる點なき、特殊特異の筆を以て四十一卷に渡る大部、榮花物語を綴りなして、王朝の文壇に一種異樣の色を添へ、茲に歷史躰文學の基をなせしは彼女なり。彼女は大隅守赤染時用が女なり、されども實は然らざるなり、彼女は平兼盛が女にして、系統上時用は眞の父にあらざるなり、何を以て然かいふや、請ふこれを辯ずべし、初め彼女が母なる人、平兼盛に嫁きたりしも、琴瑟和せざることのありて母は懷委の任、家にかへり、破鏡を嘆じて日を送れり。さるを時用の望によりて、母なん再び彼れに嫁げり。婚終へて間もなく彼女は生れたり時用己れが子となして愛育遂に人となる、さてこそ彼女は赤染衛門とは名乘れり、妙齡に達しては御堂關白道長が室倫子に仕へぬ、道長は上東門院の父にして藤氏の長者、威權

他に及ぶものなく、尤も榮花を極めし人なり、其かりそめの述懐に、

このよをば我世とぞ思ふ望月の
かけたることのなしとおもへば

と、あるにてもそれ他は知るべし。衛門此人の室に仕へ日毎夜毎、榮花の様を細しく、然かも親しく見聞き、後年老の思ひをねり、其有様をいと細しく書なせしこそ、即ち榮花物語なり。

即ち道長の榮花の様を寫せじものなり、これによりて其頃の風俗もしるべく、皇室の様も察すべく、又時代をも知るべきなり。實躰の歴史にして、又美文をも兼ねたるもの、浮花に於てはよしや讓るも、其功の多きに於ては、源氏も枕も更に及ばず、又これ我文界の秘寶たり。

近着紹介

眼の衛生　前田珍男子著　發賣所名古屋市本町三十番戸

本書は章を分ちて十八章とし、眼球及其保護器の學理より種々の眼病、之に對する豫防、治療法、眼と燈火及眼鏡を細說し從來眼病に關する世の迷誤謬信等を說破し最も親切を極む、眼は身躰中最も大切なる部なれば、かゝる書を一讀して眼の衛生を怠る勿れ（定價三十五錢）

日本開闢　大和田建樹著　日本橋本町博文館發行

此書は日本歴史譚の第一卷として、大和田建樹氏が優婉なる和文を以て、平易に日本開闢の次第を述べたるものなり、以下第廿四編威海衛まで毎月一回の約を以て豫告せり、巖谷漣氏の日本お伽噺と共に少年の讀むべきもの也（壹冊八錢）

原稿輻湊せりさ雖、編輯の都合により本號に限り其掲載を略す

社交一斑

松の内の晴衣裳

流行子

本年も例によりて新年觀察したる春衣の如何を記すべし

◎男子の禮服　多く眼に觸れたるは七子の羽織に縞市樂を上着にし、風通織二枚下着にし、仙臺の珍縞の羽織を着したるものは通常の扮裝にて、下着を前の好みにし上着だけを黒羽二重の三紋にし、市樂五つ紋の羽織を着用して仙臺の袴を着したるは銀行會社の頭株らしき社會に多かりき

◎殊に目立て見えたるは二人曳の腕車を走らせ、紺地大斜綾に緞子の裏をつけたる外套をば、車に打ちかけそれを脊にして悠然乘つたる主人は黒羽二重一寸大の五つ紋附羽織、同じく黒羽二重五つ紋上着（羽織にかくれたれど多分五つ紋なるべし）下着二枚煤竹色の羽二重、袖口の三枚共下着の色なりしを見れば裾廻しもやはり三枚揃の引返ならんか、車上より下りんさ羽織の裾をまくりし際、帶を見れば鳶茶繻珍の龜甲つなぎ、袴は博多壁鼠縞ま、共裾より銀鼠縮緬の長襦袢もちら〳〵見えたりき、場所は山の手にて、車の紋笹龍膽なりしより察すれば貴公子の類なるべし、先づ第一等の扮裝なりき

◎紳士の孃　高砂染小紋の珍裾三枚重、肉色糸綿松竹梅蔦かつらの丸帶をたいこにメめ、脊黄さ桃色さ紅の段染傘絞のしごきさいふ扮裝にて下女に風呂敷（此内には縮緬の羽織さ掛屑あるべし）を持せ行くもの多く見えたるは所謂紳士社會の孃なるべし

◎町家の娘　まがき寒菊等の模様ある紋織お召の上着、寶つなぎ古代更紗縮緬の二枚を下着に重れ、藤色縮緬の裾廻し、淡小豆七寶つなぎ等の帶をメめ、高砂染に緋紋縮の裏をつけたるは町家の娘なるべし

◎町家の女房　らしく多く見受けたるはなまこ鼠返しの小紋の上着に鶉小紋の二枚下着（無論引返しなり）黒の古代松竹梅の共模様繻紗の帶

◎上等社會の令閨　黒縮緬のふき模様、下着に白羽二重二枚無垢、又は下着二枚銀鼠のふき模様にし、白茶繻紗の寄金模様の帶をメめたるは上等社會の令閨なるべし

◎花柳社會　山糸織の薩摩筋の衣裳に角通し小紋縮緬の羽織を着せし女

箱夫を從へ褄を取つて何か配物をしながら歩行する二十より三十以下の婦人は黒に近江八景等を白ぬきにしたる裾模様上着、下着二枚利久鼠、厚板織の大丸龍の丸帶をひきほごきにし、白鹽精の半襟に白紋壁の長襦絆を着たるは此社會のものなるべし

◎幽禪の少女服　少女の扮裝中にて殊に目につきしは藤鼠の直向菊の幽禪上着に紅藤紋縮緬二枚無垢、黒色に紅葉狩の糸錦中帶〆め、櫻鼠縮緬の三紋の羽織を着したるものと

◎上色黒　にして裾は卵色のぼかしは、閑古鳥（殊は本年は多し）花見幕、緋無垢の二枚下着、樺色大牡丹の厚板中帶を〆めたるものとなり

◎洋服男兒　濃紺天鵞絨の水兵形、腕に自家の紋を金糸にてあらはし、肩に白糸の三條を縫ひ、帽子に錨の金糸赤の丈長の靴足袋を穿きたるは大々的海國人たる日本國健兒の風采勇し

◎和服男兒　黒羽二重三紋羽織、上着黒羽二重熨斗目、下着二枚千歳鼠の紋鹽精、萌黄糸織立縞の袴を着したる十歳以下の小兒が家人に連れられて市中を廻るは乃父の名代年始廻りなるべし

◎洋裝禮服　本年は殊に「フロック、コート」の洋裝を見受けたり、最流行といふべきは黒又は紺の斜綾羅紗、づぼんは同じく黒は紺の共棒縞、外套は同じく黒又紺（紺の方多かりし）の斜綾羅紗

◎肩掛と吾妻コート　吾妻コートは大流行に相違なきも新年廻禮には一々脊脱に面倒なるためにや肩掛のかた最も多かりし

◎傘　紋と匹田紋しごきは能く目につくものなるが少しく流行の氣あると思はるゝ婦人は大低此二品に限れるが如し、これは假の事なると締工合の宜しきによるなるべし

雜録

婦女子の高等教育に付て

雙榎女史（投）

雨夜亭とかいふ人經濟雜誌の上にて婦德の衰頽を論じて云はれけるは、明治に於ける女子の敎育はかの德川時代に比して退歩せりと。而して現今の女子は悉く遊惰放逸に日を送り、生意氣に、夫に從つては柔順ならず、舅姑に事へては孝ならず、家を治むるの道に暗く、子を育ふの術を知らず、唯だ己れの快樂利慾を求めて

能くとを知らず、といと〳〵切に論ぜられたり。世の中の甘さ辛さを嘗め盡して老練なる筆にものせられたるとなれば、頗ぶる事の弊に中りたるを覺え、そを彼れ是とあげつらはんは、又た〳〵生意氣とも差し出かましとも叱られんかは知らねど、五六年の間沈みに沈みし女子の高等教育いま辛ふじて再び首を擡げんとしつゝある時に當り、斯る議論の世に湧き出でたらんには、九仭のいさほしもあはや一簣に失はれやせん。經濟雜誌とも云はれて世にをぼえめでたきが斯る議論を載せんとは、少しく注意ありたく思はるゝまゝ一言を寄するになん。

吾あに女子に罪なしといはんや。德義も古へに比べて高くなりたりといはんや。否々却て婦德の衰へたるは記者の言ひ玉ふ如くなるべし。されど其の責めの在る所は却つて現今の女子にはあらで記者の慕ひ玉ふ女今川女大學より來りし教育にありとこそ思はるれ。もし古への教育すこしく婦女といふものゝ地位を辨へ、少しく道理ある婦德を教へつらんには、明治の世に如何に西洋の文明入り來り、從つて婦人に對する考への變りしにせよ、斯くまでに亂れたる有樣をば現はすまじきに、悲ひ哉世の遽かなる移り變りに百のもの廢れて古への婦德も女大學などゝ共に亡び了んぬ。斯く道德の泉涸れはて、婦女の世を渡るべき舵あらひ去られたれば、代りて德の動機となるべきもの、深く礎となるまでは、女子も憐れむべき有樣に在るは詮方なきととこそ謂ふべけれ、さるを今の婦德が廢れたればとて直ちに女子其のものに力なく、智識も發達せん望みなきが如く云はるゝは、所謂羹に懲りて膾を吐くものとやまをすべき。

もし強て今日の有樣のみを見て女子に智育を授くるとの願はしからぬを主張せば、商業學校は簿記學よりも商法よりも、只管信義正直などの道德をのみ説法すべ

く、大學の學生などには西國立志編などを主なる學課として授くべきなり。我れ幼かりしとき中學校の生徒といふ一語を古への朝鮮小兒に於る鬼上官の名の如くに恐れしことあるを覺ゆ。其頃は中學の學生は亂暴至らざるなく、眞に一揆の暴れたるも斯くやと思はるゝ程なりしとなん。もし其の時に是れ教育の弊なればとて全く新しきを廢し、唯だ古への子の曰くに返したらんには今はた如何なる國とやなり居らん。婦德か衰頽したればとて、忽ち之を教育のわざなりとし、以後は古風に復さゞるべからずなど云はるゝは、世の移り變りをも知らざるの言葉とこそ謂ふべけれ。

今日になりて男女同權など説き立てんは釋伽への説法なり。男女同權なればとて男のなすべきとは女もなすべしなど思ひ、柔順貞淑の德なきは大なる僻事なれども、其れにも增して僻事なるは昔と變らず女子を機械と心得、奴隷の如く待ふとぞかし。賢き妻、良き母を作るといふは有かたきとなれど、羊頭をかゝげて狗肉をひさぐもの多きぞかへす〳〵も嘆しき。妻として見、母として見るよりも先づ人間として見られんは、女子の切なる願ひなり。今の人は情のために妻を娶らさるまでも、家を治めしめんがため、子を育はんがために結婚するが山々なり。女子は内に在りて家を治むべきもの、子を育ふべきものとは恰も動かすべからざる律法の如くに世に信せらるれど、此はいつか世誰人の定めし所ぞや。唯だ男女同等の兩性相合して愛に由て一つとなり、一つとなりて後にそれ〳〵其の天性に從つて一家を治むるてふ考へなくば如何でか眞の德の存すべき。斯く一躰となりたる後にこそ始めて家族の出來るなれ。家族を作らんために一つとなるとは實に心の賤しき限りなり。

近頃は智育といふと女子には殆んど無用のやうに思はれて、或る學校は英文高等科を廢し、又た是れまで英

文學を第一とせし府下有力の或る學校も、こたび改革して和漢の學に重きを置くとかや。我か見る所を以てすれば、今よりこそ益す此れ等の高等教育を奬勵すべきなれ、今の女子の過ちは智識の足らざるより來るぞかし、あるは生命かけて結婚し、まだ幾月も經ぬに去り去られ、あるは浮きたる男の子に誑かされて憂の中に花の齡を風に散らすなど、數ふれば皆な道理を思ふの心薄くして只管ら感情に誤らるゝに由るならずや。道德の心か誰だ女は斯くあるべきものと上より押し入れられては、或は却つて貞節淑操など守り得るともあらんなれど、女子の心智の進步發達は思ひも寄らぬととなるべし。世の多くの不幸、詩人小說家か同情の淚、慨嘆の筆もてものせる悲しき哀れなる出來事は、一つとして男子女子の智識同じからさる所より起らぬなきを見れば、たとひ今の時直ちに同等なる人間となすとは出來さるまでも、行く／＼は男子と同じ地位に進むやう、高等なる教育もて導くこと最も望ましき限りなれ。斯くして賢き母となり善き妻となり、國民の幸福はまた大いなるべし。女に對する思ひの斯くまで賤しき間は文明の光りは倘ほ日本に照りしにはあらぬぞかし。

兒守

肥後　撫子（寄）

兒守とは何ぞや曰く下等なる賤女のみと然り兒守の多くは下等の賤女無學の娘子に過ぎず、其れと共に世人の感想尤も冷膽なり粗末なり、是れ果して兒守の品位の下賤なるが、吾人は思ふ是れ世人の定見の實に無學にして野卑なるを憐れまざる可からず

勿論兒守個人の身上に付ては無學なる娘子ならん、下等なる賤女ならん、然れ雖兒守なる職分に付ては如何

神聖にして高貴なるかを知らざるか見守は小兒に對して家庭教育の保護者たり助教授なり家庭教育を重ずる有らば豈に下賤の職掌と言ふを得可けんや、兒を養ふ點に至りては勿論父母に及ばざる遠し、然りと雖、小兒を教育する點に到りては、父母を凌駕する遙に遠し、依て小兒に對する其の必要なる點に到りては却て父母の上位に有る者に非ずや、例へば此處に庭木を仕立てんとせんか、木を養ふは肥料に非ずや、然りと雖、肥料のみを與へて只に長大ならしむるも、誰れか此れを賞與する者有らん、仕立屋あつて初めて、枝を曲げ雲中にある龍を裝ひ或は兩虎深山に雌雄を戰かはすの情を現はして人初めて是れを賞讃す、松に於ける肥料は、既ち父母にして、仕立屋は是れ見守（或は進んで教師）に非ずや、然れば見守は人間毀譽を兩別するの力を有す豈見守なる者猥りに輕蔑す可き者に非ざるなり、然れ雖世人多く見守を輕蔑す吾人は實に世人の見識の底きを笑はざる可からず

世人が見守を冷視し、輕蔑するの决果は如何、已が大事の小兒の教育を放任す可き見守を撰擇せざるに非ずや、是れ大なる誤見と言はざる可からず、否な决して誤見に非らざるなり、世人頑愚、見守と言ふ者は如何なる物であるかを知らざるが爲なり、

世人の多くの腦中には小兒七歲にして、學校に入り、此の時に於て教育は初まり完全なる人間を製造し得ると思覺せり否な彼等は智識を研くを知つて完全なる人間と言ふ事を知らざるなり、頑愚も亦た甚しからずや、人間の教育は生れて遠からず。開始せらるゝを知らざるか。小兒の教育は、父母が可愛々々と抱く時に愛らしき目で父を見る樣になりし時、父母が赤き花を振てウッツウッツと呼ぶ時、花を見て兩手を擴げて取らんとする樣になりし時、早や教育は開始せられ居れり、凡て此の小兒の腦髓は其れ迄は純粹淡白なるものにし

て、常に此の小兒を加護する兒守或は父母の言行が純粹淡白なる腦髓に射入して彩色を現はし。善惡邪正を生じ來る者なり、人生れて六才に及べば人間と言ふ形像は完全する者なり、是より以後學校に入りて學問するは此の人間と言ふ形像に光艶を現はすのみの事なり依て此の形像を完全に製造せずんば、此の形造にして曲がりよがみし者たらば如何に光を現し、艶を出すとも、曲がりは曲がりよがみはよがみに非ずや、然り然れば此の形像を製作する者は唯れなるか是れ赤兒の時から父母に替りて暖懐に抱へ來りし守兒なり、噫兒守は人間を養成するに最要者に非ずや、兒守の職分や高貴神聖ならざる可からざる道にあり、然りと雖世人既に兒守を捨てたり、兒守と言へば下等の賤女最下等の職分とは一の定義となれり、斯くの如くにして、善良なる兒を求めんとするは木に寄りて魚を求むるの類に非ずや今日の兒守の風儀は如何此の神聖ならざる可からざる兒守社會は輕薄、粗暴、猥言、醜行なる惡潮渦中に有り小兒が此の感染を受けると思へば唯れか是れが撰擇の必要を感ぜざる者あらん然りと雖兒守なる者は既に下等の賤女無學の娘子たるの定義の内にあり兒守自身が眞聖ならざる可からざるとを知らず、尺度の底き故撰擇何の効か有らん、世人は此處にかいて。他に良策を求めずんば非らず。是れ何んぞ、兒守教育場とも言ふ可き、守兒戯遊場を設くるの必要あるを感ず此の遊戯場は、悉皆教育的の趣向によりて建設し、相當の監督者を置て監督教育せしめたらんには。兒守をして。眞聖の兒たらしむる難事に有らざるを知る、聊か一言を陳べて、有爲婦人に寄す

歌苑

すゝきの影

東京　伊藤煙村

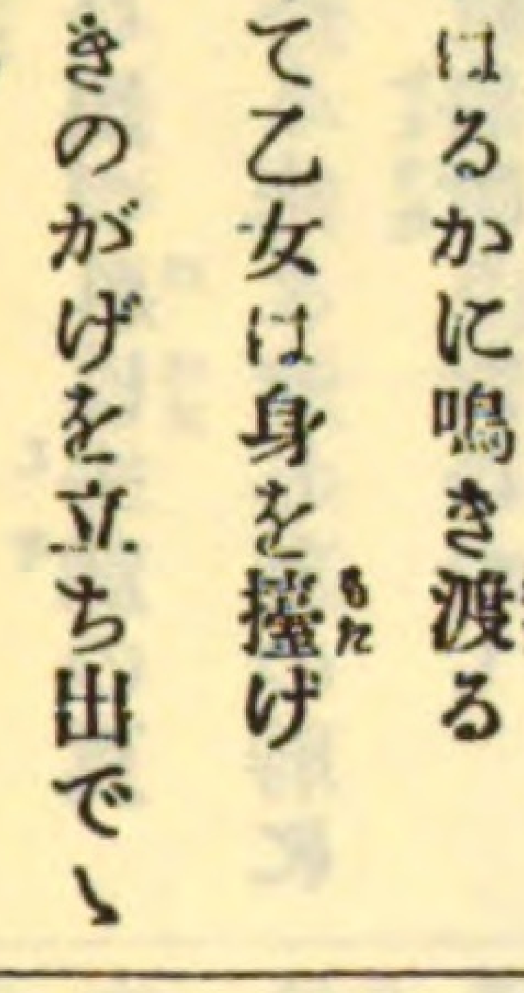
かたみに殘る高殿の　礎さへ今は朽ち果てゝ
むかしを忍ぶ志のび草　信夫文字摺り破れにし
簾のひまに茂りあい　昔し榮へし夢の跡
尋ぬる術もなかりけり　遠く聞ゆる山でらの
入相告ぐる鐘の聲　身に浸み渡る秋の暮
小暗き方に蟠かまる　年經る松の根方には
底さへ分かぬ古井戸の　汲む人とてもなきまゝに
桁も半ばはくちはてゝ　尾花すゝきにかゝるなり
かゝる淋しき原中を　かよわき乙女唯ひとり
いかに歎きのあるならむ　袖に泪を押へつゝ
道の小石にあまたゝび　つまづきつゝも辿り來て
古井の桁に身をよせぬ　尾花の風に躁ぐ音
もしや人かと思ひけん　涙にうるむ眼にて
あたり見廻すいぢらしさ　折しも遠き山の端を
さし出る月のさやけさに　乙女は身をば耻らひて
すゝきの影にかくれ鳬　葉末の露を命にて
啼く蟲の音もこの時に　暫し靜まり今は唯
梢を鳴らす風音と　乙女のかこつ聲すなり
黄金の淵に埋もれて　如何に人には册づかれ
榮ゆる夢を見んとても　などか妾はこのむべき
後の母上いかばかり　すゝめ玉ふもこの身には
末の松山すゑかけて　契りし人のあるものを
操をすてゝ他し男に　いかでこの身を任すべき
今はあの世の母上の　許し玉ひし戀人は
四歳のむかしこの郷を　立ち出で今は東路の
都の空に螢火や　雪の光りに學び路の
長き月日の間にも　交せし文のかず〲は

今も文筥に滿つるなり　過ぎにし春の便りにも
ことしの秋の末つかた　學びの庭にいそしみし
業をも終へてふる郷に　かへりて來なば諸共に
嬉し逢瀬近けれど　優しき君が面影の
寫し給までも取り添へて　送り玉ひしその時の
我よろこびや如何なりし　思ひ出づれば去歳の夏
君は學びの暇を得て　かへり來ませしその時に
二人うち連れこの野邊を　君は唐歌うたひつゝ
妾は君かふみ袋　編みつゝ共にこし方や
身の行末の樂しさを　語りあいつゝをもしろき
そゞろあるきに永き日も　いとゞ短かき心地して
今は夕飯に近ければ　歸り來ませと妹の
馳せくるさへも恨めしく　思ひしことも今は早
哀れ夢とはなりにけり　妾は君が業終へて
錦まとひつふる郷に　今日は來まさん明日こそと
指折り數へ松が枝の　清き操を守りしに

思へばそれもあだなれや　我はこれより母上に
草葉のかげにま見へなん　夜寒が原の夕露と
消へて果敢なき我いのち　せめて今はのこの際に
假令みじかき難波江の　蘆のかりねの束の間も
君と逢見んすべあらば　妾はいとゞうれしきに
それさへ今は望みなし　年老ひませし父上を
捨てゝ先立つ我罪は　身を沈むべきこの井戸の
深き底より深けれど　父上ゆるし玉ひてよ
あとに殘らむ妹を　思へばいとゞ悲しさも
いやまさり來て後ろ髮　こゝろも共に引かさるゝ
我亡きあとはひたすらに　我身にかわり父母に
こゝろを込めて仕へてよ　我戀人の居ますなる
武藏野原の月影は　夜寒が原の今日の月
海山遠く隔つとも　冴へ渡りぬるこの月を
今霄は君もながむらん　月よこゝろのありもせば
我言傳をあづま路の　戀しき人に傳へてよ

我が心根の志のばれて　哀れと思ひ玉ひなば
妾はいとゞ嬉しけれ　我今亡せしその後は
妾に勝る妻を得て　いと睦まじう世の中に
まさきく月日送りませ　草葉のかげに聞く我の
いかで恨みに思ふべき　されど妾は願ふなり
たとへこの世の緣しこそ　空蟬の羽のうすくとも
百歳後はもろ共に　法の御園に限りなく
樂しき夢を結ばんと　言ふ聲さへも今は早
群に別れて行く雁の　雲井はるかに鳴き渡る
聲もろともに微かなり　かくて乙女は身を擡げ
泪の露を拂ひつゝ　すゝきのかげを立ち出でゝ
諸手を合せ西ひがし　ふし拜みつゝ古井戸の
中を望めば水の面に　をぼろに映る我姿
見をろす我を招くなり　折しも月は村雲に
隠れて今はほの暗く　ほのかに見ゆる小祠の灯
木魂に響く梟の音　秋の淋しさいや増して
古井の中にいと高き　水のひゞきぞ残りける　(終り)

◉正誤　本號史談「ワシントン、アーヰング」の中、Westminster albey とあるは Westminster abbey の誤植



世界叢書第一册

ダーウヰン

肖像及挿畫入　定價十五錢　郵税四錢

早稻田文學評　今や進化論の偉功は我が國の兒童も聞き知れるチヤールス、ダーウヰンの傳を平明暢達なる筆もて綴られたり、勤勉なる生涯、誠實なる人物尤も少年の讀物たるに適す、末章にはいさ簡略ながらその進化論の大意をも説明せり

都新聞評　ダーウヰンは造化論者として人既に之を知る然れども如何にして造化論を發明したるやは之を知るもの稀なり此書以て之を知るに足るべし

◎國民之友第十八卷合本

自明治廿九年一月至仝年六月
定價金壹圓遞送料は此外（量五百目）

◎家庭雜誌第七卷合本

自明治廿九年一月至仝年六月
定價金五十錢遞送料十四錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

綠亭主人著（家庭叢書號外）

紫式部

定價金十五錢
〇郵税金二錢

大日本評

家庭叢書の號外として出づ。紫式部の經歷系統より、其性行、其著作、其愛に對する理想、源語に於ける人を論じ、散文家としての式部を評し、王朝文學と式部の關係を明かにして、最後に源語の梗槪を載せたり。劈頭に曰く『彤管一枝、麗文花の如く、錦腸萬解、妙想月の如く、燦爛眩眼、光彩陸離』と是紫女一代の才筆を叙したるものなり。是或は著者の事にはあらざるか。一編二百頁の小冊子、花の如く、錦の如く、縱横自在なる彤管を以て紫女の才を寫し、想を寫し、人物を寫し、閲歷を寫し、將又其彪然たる大著書を寫す、一點苦悶の跡なく、圓轉流麗たり。

早稻田文學評

第一章に式部の系統を說き、第二章に其の性行を說き、第三章に其時代を說き、第四章に其の愛に對する理想といふものを說き、第五章に物語の組織を說き、第六章に此れに見えたる人を說き、第七章に散文家として紫式部を說き、第八章に王朝文學と式部との關係を說き、終りに物語の梗槪を擧げたり、論斷考據の精粗はしばらく措き、例の通り面白くさら〳〵と讀み了らしめて、而も式部が面目ほゞ窺ふを得べし、重寶の書とやいふべき。

東京朝日評

家庭叢書號外として出づ其經歷系統性行源語著作の時代式部が愛に對する理想源語の組織源語に於ける人散文家としての式部王朝文學と式部源氏物語梗槪等を錄す

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

家庭雜誌

（卅年一月廿五日）　九十四號　（價壹冊五錢拾二冊五拾錢郵稅壹冊五厘）

春期大附錄

家庭雜誌第九十四號（卅年一月廿五日）

雞林蹈破（口繪）　米僊

これ米僊畫伯が新春心澄み氣旺なるに乘じて精神飛舞、筆に聲あるもの、

漁師の娘　蘆花生

霞が浦邊に咲き出でし蓮の一本、汚より出でゝ汚に染まず、惜しや早く散りしかど、香は長き短物語、

金魚の盞　二十三階堂

崎陽に買人あり、世々金魚を商ふ、一年長風に乘じて浪花の津に到り、週遊百日、身は徒に朝市に走つて心空しく陶朱の富を羨む、誤つて千金を流水に委し、されば魚魂長なへに盃中にとゞまる、長柄の長者が庭園の景趣は舊日本の面影を遺し、金魚賣が昔語は德孤ならざる冥理を說く、

少女おなみ　春夢

廣叉漠、無窮無極の天地間、山岳の大、海洋の浩を存すと雖も、而も十四歲の一少女を容るゝ能はず、父にして父にあらざる父、母にして母にあらざる母、子にして子にあらざる子、此間に起りし悲痛凄惋の社會小說、今や作者筆を起して經營慘憺中に在り、

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行